

おおびた遺跡

—八千代市少年自然の家建設地内遺跡—

1975. 2.

おおびた遺跡調査団
八千代市教育委員会

おおびた遺跡

—八千代市少年自然の家建設地内遺跡—

1975. 2.

おおびた遺跡調査団
八千代市教育委員会

序 言

八千代市は市制が施行されはや7年が過ぎ「調和のとれた健康都市」を目標としてめざましい発展を遂げております。

この都市造りの大きな柱に「人間性を培う教育、文化の充実」という項目があります。この目的を果す為には是非必要な計画の一つに歴史的な環境造りの問題があります。

これは過去から伝えられた私達の文化的遺産の中で人々が豊かに暮らしていく事です。それ自体は直接には目に見えませんが間接的に人々の心の中に知らず知らずのうちに語りかけていくものです。

過去から伝えられた文化的遺産を普通「文化財」と呼び、この文化財の保護には2つの大きな意義があります。一つは文化財を通じて人間精神を豊かにし、新しい創造力や人間性を呼び起こす事にあります。もう一つは文化財を通じて人間の悠久な歴史に想いそはせ、人間のはるかな未来を考えその発展に寄与する事です。

この様に文化財は祖先から伝えられ子孫に遺すべき民族の大切な宝で、自然や生物と同じ様に一度失なったり、破壊されたりすると元に戻す事ができない性格を持っています。都市化に性急な余り数十年後、数百年後に後悔したり、批判されたりする様な事があつてはなりません。

ある国の文化財への理解とその国の市民的成熟度の度合は正比例するとよく云われます。自然と歴史が美しく調和した都市を建設する為、都市化との神経の行き届いた理想的な調和を計り、長い目でみた「理解」と「忍耐」や「協力」が強く望まれます。

この立場に立つて本市では文化財の保護と活用を計り、文化財予算や諸施設、人員の充実を目指し文化財保護行政の体制造りを進めていきたいと考えております。

今回のおおびた遺跡の調査は種々の事情から保存措置をこうじたりする事ができませんでしたがそれにも拘わらず夏の炎天下の調査を引き受け、この報告書を完成させて頂いた「おおびた遺跡調査団」各位の御芳情に厚く感謝申し上げますと共に、地元で種々の御協力を頂いた保品の方々に改めて深甚なる謝意を表するものであります。

昭和49年 3 月 20 日

八千代市教育委員会
教育長 市川 浩一

例 言

1. 本書は千葉県八千代市おおびた遺跡の第1次（確認）調査及び第2次（本）調査の結果を記録した報告書である。
2. 本書は、分担執筆をし文末に執筆者名を記した。
3. 本書では第1次調査、第2次調査の兼ね合いから層序や名称等一部に異なる点がある。
4. 本書では写真図版を図版とし、実測図、地図、図等の挿図類は図で表示した。
5. 挿図の縮尺は各図事にスケールで示した。
6. 本文中でのGはグリットの略号である。

本文目次

序 言	教育長市川浩一	
例 言		
第1章 調査の概要		1
1 調査経緯	増田誠蔵	1
2 遺跡の立地	安達 新	2
3 調査の概要	村田一男	6
4 第1次調査経過	熊野正也	8
5 第2次調査経過	安達 新	10
第2章 A地区		13
1 発掘区設定・層序	堀部昭夫	13
2 遺構・遺物	熊野正也	13
第3章 B地区	中山吉秀	18
1 傾斜面の調査		18
2 遺物		19
第4章 C地区		21
1 遺構	増田誠蔵	21
2 遺物	中山吉秀	22
第5章 D地区	安達 新	27
1 層序		27
2 第3層出土の遺物と出土状態		27
3 遺構と遺物		39
第3号北、南住居址		39
第4号住居址		51
第5号住居址		68
第6号住居址		70
第7号住居址		80
高床式建築址		92
野外焼土址・柱穴址		93
第6章 E地区	安達 新	97
1 層序及び出土遺物		97
2 遺構(1) 古墳		101
(2) 炉穴と土竈		102
結 言	団長 増田誠蔵	103

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡の位置	3
第 2 図	遺跡の立地	4
第 3 図	調査地区の位置	7
第 4 図	A・B・D地区の調査範囲	7
第 5 図	第 1号・2号住居址実測図	14
第 6 図	第 1号・2号住居址出土遺物実測図	16
第 7 図	1. B地区土層断面図 2. B地区出土の土器	18. 20
第 8 図	C地区トレンチ配置図	21
第 9 図	C地区出土遺物実測図及び拓影図	23
第 10 図	D地区第 3層出土遺物実測図	33
第 11 図	D地区第 3層出土土器拓影図	34
第 12 図	D地区第 3層出土土器拓影図	35
第 13 図	A・D地区グリット図	37
第 14 図	A・D地区遺構全景図	37
第 15 図	第 3号北・南住居址実測図	43
第 16 図	第 3号南住居址床面出土遺物実測図	45
第 17 図	第 3号南住居址床面近く、覆土出土遺物実測図 第 3号北住居址床面近く、覆土出土遺物実測図	46 46
第 18 図	第 3号南住居址覆土出土剣形石製品実測図	42
第 19 図	第 4号住居址実測図	53
第 20 図	第 4号住居址床面、床面近く出土遺物実測図	55
第 21 図	第 4号住居址覆土出土遺物実測図	56
第 22 図	第 4号住居址覆土出土遺物実測図	57
第 23 図	第 5号住居址実測図	67
第 24 図	第 5号住居址出土小形埴実測図	68
第 25 図	第 6号住居址焼土、木炭出土状態実測図	71
第 26 図	第 6号住居址実測図	71
第 27 図	第 6号住居址、床面、覆土出土遺物実測図	73
第 28 図	第 7号住居址実測図	83
第 29 図	第 7号住居址、床面、覆土出土遺物実測図	85
第 30 図	第 7号住居址覆土出土遺物実測図	86
第 31 図	第 7号住居址覆土出土遺物実測図	87
第 32 図	D地区高床式建築址実測図	92

第 33 図	D地区各住居址出土土器拓影図	94
第 34 図	E地区グリット、遺構全景図	98
第 35 図	E地区炉穴、土拵実測図	99
第 36 図	E地区古墳墳丘断面実測図（北壁）	99
第 37 図	E地区出土土器拓影図	100
第 38 図	E地区出土地輪実測図	100

図 版 目 次

図版 1	遺	構 1	遺跡遠景（真上より）
		2	遺跡遠景（南方より）
		3	遺跡近景（南方より）
図版 2	遺	構 1	発掘地区全景
		2	A・D地区住居址全景
図版 3	遺	構 1	C地区第6・7トレンチの第1号住居址
		2	C地区第9トレンチの第2号住居址
		3	B地区発掘状況
図版 4	遺	物	C地区出土遺物
図版 5	遺	構 1	D地区発掘前全景
		2	D地区グリット全景
図版 6	遺	構 1	第1・2号住居址全景
		2	第1号住居址貯蔵穴
図版 7	遺	構 1	第3号北・南住居址全景
		2	第3号北・南住居址落込確認状態
		3	第3号北・南住居址東壁断面
図版 8	遺	構 1	第3号南住居址貯蔵穴附近
		2	第3号南住居址貯蔵穴
		3	第3号住居址火山岩滓（2）出土状態
		4	第3号住居址小形壺（8）出土状態
		5	第3号南住居址剣形石製品（27）出土状態
図版 9	遺	構 1	第3号南住居址西側附近遺物出土状態
		2	第3号南住居址甕（4）出土状態
		3	第3号南住居址甕（5）出土状態
		4	第3号南住居址高坏（7）出土状態
図版 10	遺	構 1	第4号住居址全景

- 2 第3号北・南・4号住居址全景
- 図版11 遺 構1 第4号住居址東壁附近
2 第4号住居址北東隅貯藏穴
- 図版12 遺 構1 第4号住居址南東隅附近
2 第4号住居址壺(5)出土状態
3 第4号住居址甕(6)出土状態
4 第4号住居址粗製小形土器(16a)出土状態
5 第4号住居址三角形土製品(15)出土状態
- 図版13 遺 構1 第4号住居址西壁附近
2 第4号住居址西壁南側貯藏穴
3 第4号住居址西壁北側貯藏穴
4 第5号住居址全景
- 図版14 遺 構1 第6号住居址全景(第1段階)
2 第6号住居址西壁(第1段階)
3 第6号住居址南壁(第1段階)
- 図版15 遺 構1 第6号住居址全景(第2段階)
2 第6号住居址西壁附近(第2段階)
- 図版16 遺 構1 第6号住居址貯藏穴
2 第6号住居址木炭(C10附近)出土状態
3 第6号住居址北西隅木炭(C9, 11, 12, 13, 16)出土状態
4 第6号住居址小形壺(1)出土状態
5 第6号住居址木炭(C13附近)出土状態
6 第6号住居址木炭(C15附近)出土状態
- 図版17 遺 構1 第6号住居址南壁(第2段階)
2 第6号住居址甕(2)壺(3)出土状態
3 第6号住居址木炭(C4)出土状態
4 第6号住居址木炭(C18)出土状態
5 第6号住居址カヤ(C8)出土状態
- 図版18 遺 構1 第7号住居址全景
2 第7号住居址階段状遺構(捨灰)
- 図版19 遺 構1 第7号住居址張り床面の状態(西から)
2 第7号住居址小形壺(6)出土状態
3 第7号住居址磨り石(1)出土状態
4 第7号住居址高环脚台部破片(5)出土状態

- 5 第7号住居址高坏か器台脚台部破片(4)出土状態
- 図版20 遺 構 1 E地区発掘前全景
2 E地区発掘後全景
- 図版21 遺 構 1 E地区古墳墳丘断面(北壁)
2 E地区周溝肩部(西より)
3 E地区周溝肩部(東より)
- 図版22 遺 構 1 E地区炉穴, 土壇
2 E地区炉穴
3 E地区土壇
- 図版23 遺 物 D地区第3層出土 3, 9, 6, 1, 18, 16
- 図版24 遺 物 D地区第3層出土 19, 20
D地区第3層, 各住居址出土小石
- 図版25 遺 物 D地区第3層出土土器拓影写真 1~20
- 図版26 遺 物 D地区第3層出土土器拓影写真 21~36
- 図版27 遺 物 第3号南住居址床面出土 4, 7, 5, 6, 3, 8
- 図版28 遺 物 第3号南住居址床面, 覆土出土 1, 2, 27
第4号住居址床面出土 6, 5
- 図版29 遺 物 第4号住居址床面覆土 出土 2, 3, 7, 15, 1, 16a, 16b
- 図版30 遺 物 第4号住居址覆土出土 30, 27, 32
第5号住居址床面, 覆土出土 2~4
- 図版31 遺 物 第6号住居址床面, 覆土出土 3a, 1, 8
第7号住居址床面出土 6, 1, 3, 2
- 図版32 遺 物 第7号住居址覆土出土 29, 20, 30, 21, 38, 28
- 図版33 遺 物 Ⅱ地区各住居址出土土器拓影写真
第3号南覆土出土 28~30
第4号覆土出土 48~51
第5号覆土出土 5~8
第6号覆土出土 9, 10
第7号覆土出土 41~44
第7号床面出土 45
- 図版34 遺 物 E地区出土土器拓影写真 1~12
E地区出土埴輪片 16, 17

第1章 調査の概観

1. 調査経緯

八千代市は昭和48年度の教育事業の一環として市内保品に「少年自然の家」の建設を企画し、昭和49年3月をこれの完成日標として諸般の準備を進めることとなった。たまたまこれの建設敷地は「千葉県記念物所在地図」に記載されている「保品おおびた遺跡」を代表名とした広汎な土器片散布地の一端にあたり、特に建築予定地の3分の1を占める東方平坦地帯は多量の土器片散布を見る畑に隣接しており、その集落の一部が建築予定地内に及んでいることも充分予想されるところであった。他方、須賀地内を南北に走る道路と建築予定地を結ぶためにはば東西方向に設定した幅員7.5m長さ約67mの進入路と呼称する車道予定地に於いても土師器及び、雲母片を多量に含んだ一見縄文時代中期の阿玉台式と思われる土器の破片数点が表面採集で得られ、これもまた遺構の存在が予想された。

「少年自然の家」の建設は市の少年教育に対する熱意の現われであり、また埋蔵文化財の重要性についても知悉している市教育委員会は、当面の問題点である建築予定地及び進入路に古代の遺構が存在するか否かの調査を行なうこととして、市文化財審議会に調査団の編成を依頼し、これの結成後直ちに調査に当たれるよう全面的な支援態勢、並びに、調査に支障を来さぬため市教育委員会社会教育課の全力を挙げて準備と諸交渉に当った。市文化財審議会は短期間の調査日数を考慮の上、市内発掘調査に於いては曾って無かった隣接市の著名な調査員の応援を得て調査団を編成し、昭和48年6月2日から同10日まで9日間にわたる遺構存否の調査を実施した。

この結果、弥生時代前野町式の土器を出土した住居址を含めて3軒の住居址遺構を進入路に認め、「少年自然の家」建築予定地40m×80m中、確認調査の対象とされた南半40m×40mの範囲中に於いて古墳時代五領期に属する住居址2軒と、建築予定地内に延びる住居址の一部と思われる遺構の存在を認めた。以上の調査結果から市文化財審議会は進入路を記録保存の調査も無しに舗装路とすることは、市文化財行政の指導の面から推して思わしくない結果を招くこと、並びに、東部平坦地にあつては未調査部分に入りこむ古代の住居址と思われる遺構が認められ、なお平坦地の広さから推して、こゝに数戸の住居址の存在を想定させること、更には「おおびた遺跡」は広汎な面積にわたり「少年自然の家」に接する東の畑地が、表面採集の土器片の散布状態によって古墳時代の集落の中心と思われる。このため将来、この畑地が発掘調査の対象となった場合、「少年自然の家」建築予定地の調

査は将来の調査に不明な区域を残さぬため、換言すれば、市内古代遺蹟の性格把握のためにも記録保存の要はある。との結論を得て、市教育委員会にこの旨を伝えた。八千代市教育委員会は近年急速に発展開発されつつある市内に於いて、埋蔵文化財が記録保存も無いまま、燻滅する現況を憂慮しつつある現況打開のためにも、市が主体となる事業地内の遺蹟の処遇に関しては率先その範を示すべしとの方針のもとに、関係者間で協議を重ねた結果、こゝに記録保存のための発掘調査を行なうべく、再度市文化財審議会に調査団の幹旋を要請した。市文化財審議会は前回の確認調査と今回の調査とに一貫性を持たせた調査員の編成を主とし、なお且つ連日常駐して調査の推移を把握し、これの記録を成し得る調査員2名を加えた調査団を編成した。如上の経緯を経て昭和48年7月8日から同31日まで24日間、第2次の調査を行なった。確認調査の結果については既に調査概報として報告はしているが、今回の調査と不可分のものであるため、その後の知見を加え、名称も第一次調査と改称してこゝに詳述した。本書は「おおびた遺跡」内「少年自然の家」建築予定地に於ける、この前後2回にわたる調査の報告書である。 (増田 誠 蔵)

2. 遺跡の立地 (第1, 2 図, 図版1)

本遺跡は千葉県八千代市保品おおびたにあり、今回の調査地は保品小字須賀地域である。この遺跡は千葉県北部の下総台地の中央部にW字状に広がる印旛沼の西端にあり、佐倉市と印旛郡が接する八千代市の北東端に位置する。この附近は上高野、村上、米本、保品等の標高20数mの一連の台地群が固まる所であり、北面及び西面を新川に、東西を印旛沼及び印旛沼から発する大小の河川により囲まれた水郷の地である。

なお新川は印旛沼から東京湾へ流れる印旛沼疏水路であり、近年の掘削工事により完成したものであるが往時には新川附近の沖積低地は印旛沼の一部をなしたり、或いは沼や湿地帯であったと考えられる。

さて遺跡の所在する保品台地はこの一連の台地群の北東に存し、さらに遺跡はこの保品台地より沖積地に向かって北東に方台状に張り出した台地上に存在する。

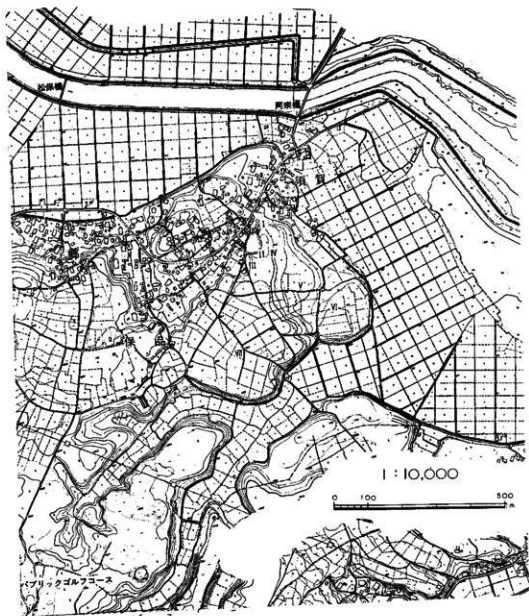
この方台状の台地は前面及び両側を新川、印旛沼及び佐倉市境附近の支谷により開析されたイリアス地形をなし、印旛沼と新川の分水嶺の南岸にあたり、新川の左岸でもある。

遺跡はこの方台状の台地の南東部を占め、川側にあたる東側から南側へかけては開けた地形で新川、印旛沼を見渡せる広大な沖積低地に接している。山側にあたる北側から西側へかけては保品台地の平担部と連なるが、複雑なイリアス地形の結果として浅い支谷が台地を削り、比高10m未満の急峻な斜面が隣接する台地と一線を画している。



第1図 遺跡の位置

○印は遺跡 1:50,000 佐倉



第2図 遺跡の立地

- | | | |
|--------------|--------------------|------------|
| I 長方形土堤 | IV ABD地区 | VII 保品平台遺跡 |
| II 円墳(C・E地区) | V 環状微地形 | |
| III 円墳か塚 | VI (A618) 保品おおびた遺跡 | |

従ってこのような遺跡立地は台地縁辺部に存在しながらもあたかも新川、印旛沼低地に向って南北へ張り出す長い独立丘陵状を呈すると考えてもよいと思われる。

遺跡はおよそ南北500×東西300m、標高14～23m、比高11～20mの範囲におよび、山側、川側と上下2段丘面に区分される

川側にあたる低い方の第一段丘面は標高14～16m、比高11～13mで緩やかな斜面と平坦な段丘面で構成される。南部は広い方台状の平坦面をなし、この平坦面は北方にゆくにつれ次第に狭まり、ついには第二段丘の先端と合流する。

山側にあたる高い方の第二段丘面は標高22～23mで、第一段丘面とは比高6mの緩やかな崖線により画され、断面が丘状をなす急峻な丘陵地形である。

なお地学的にはこの台地は下総台地の一角をなす東葛台地に属し、印旛沼、手賀沼地域を結ぶ低地帯の南縁ほぼ中央に存在する洪積世火山台地である。またこの台地を構成する二枚の段丘は高度、比高及び洪積世火山灰層がみられることより、第一段丘面はいわゆる千葉第一段丘に、第二段丘は下総下位面にあたるものと思われる。(注1)

本遺跡の分布調査では、第二段丘北端に中世の土壘、或いは馬囲いかと思われる長方形の土境(縦50×横30×土境高3～4m)がある。長方形土境の南西25mに殆んど破壊された円墳が1基存在する。今回の調査対象地区のE地区である。またE地区南方数10mの所はC地区となる。

さらに円墳の南方35mの所に半円状の径15m、高さ2mの円墳或いは塚と考えられるものがある。

一方第一段丘面南部の方台状の部分は八千代市遺跡分布No18「おおびた遺跡」にあたる範囲で縄文前期～中期の土器片が散布する。この北方には土師器が散布する中央窪地の環状地形があり、さらにその北方が今回の調査対象地のA・B・D地区となる。

全台地の現状は、第一段丘は畑地、竹林或いは未耕地であり、第二段丘は植林による杉林或いは雑木林が植生している。

従って壊滅した円墳を除き遺跡は重大な変更を受けておらず遺構遺物の保存状態はかなり良好なものと思われる。遺跡の分布調査からは縄文時代から歴史時代にわたる集落址、墓址その他の遺構を形成する広汎な複合遺跡であることが判明したが、今回の調査でもその性格は十分に確認できた。(安達 新)

(注1) 「地形の発達」 杉原重夫 1972(市川市史第1巻)

3. 調査概要 (第3図、図版2-1)

おおびた遺跡の広さは約0.15km²で今回の調査対象地はこの遺跡の一部である保品小字須賀1061-1, 1062-2-1番地の約3850m²である。

調査区設定はA, B, C, D, E地区を各々第3図のように設定した。A, B, D地区は少年自然の家建設用地であり、E, C地区は自然の家への車両進入路である。

確認調査の性格を持つ第1次調査では、A, B, C地区を、本調査の性格を持つ第2次調査では、D, E地区を各対象地区とした。

第1次調査(確認調査)

調査対象地区 A, B, C地区

発掘面積 約430m²

発掘期間 昭和48年6月2日～6月10日

整理期間 15日

調査人員 延べ160人

A地区 自然の家建設用地の南半分にあたり、D地区と隣接する。4m方眼に組んだI～IV～1～10Gの500m²の範囲である。実際の発掘面積は約328m²である。なおI～10Gの東半分も調査した。

古墳時代五領期の住居址2軒と土師器、木炭等が出土。

B地区 自然の家建設用地の中央西側のトレンチである。A地区III-8GからXI-8Gまでの巾1m、長さ26mの範囲である。実際の発掘面積は26m²である。特別な遺構はなく、若干の土師器が出土。

C地区 初めに予定された自然の家への進入路で、自然の家の南西コーナーから西方へ向かい巾7.5m、長さ67mの範囲にあたる。発掘面積は約80m²である。

弥生時代前野町期の住居址の一部と縄文時代もしくは古墳時代の遺構らしきものが検出され、縄文～古墳時代の遺物が出土。

本地区は住居址にかかるため現状保存とする。

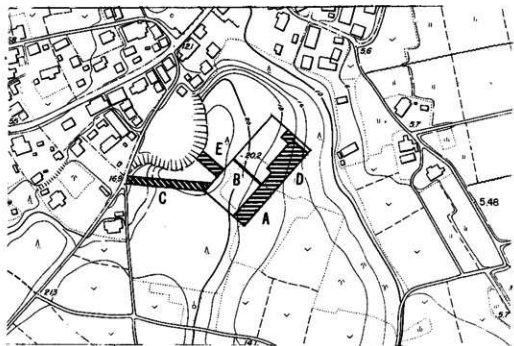
第2次調査(本調査)

調査対象地区 D, E地区

発掘面積 約760m²

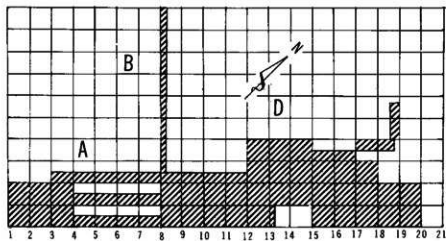
発掘期間 昭和48年7月8日～昭和48年7月31日

整理期間 昭和48年8月1日～昭和49年2月28日



第3図 調査地区の位置

A～Eは調査地区を示す



第4図 A、B、D地区の調査範囲

/// 調査範囲

0 8m

調査人員 延べ250人 整理人員 延べ200人

D地区 自然の家建設用地の北半分にあたり第1段丘の平坦部から第2段丘の緩斜面にかけての40×40mの範囲である。A地区に隣接しグリッドではI～V-11～20GとV～VI-18～20Gであり実際の発掘面積は約760㎡である。

遺構は数多く出土し、住居址では、弥生時代長岡期1軒、古墳時代五領期3軒、和泉期1軒、時代不詳1軒、他に掘立柱1軒、野外焼土数基等が検出される。

遺物は縄文時代～古墳時代までにわたり、弥生、古墳時代を中心として完形土器20数個体、石器7点、土製品7点、石製品1点、鉄製品1点等が出土する。

E地区 C地区が現状保存されるために新たに設定された自然の家への進入路である。発掘期間は7月8日から7月15日までである。自然の家建設用地のXI-5G附近から西方向へ向い、巾7.5m、長さ20m未満の範囲にあたる。実際の発掘面積は60㎡である。土取りされた円墳とそれに附属する周溝があり他に野外炉穴と土拵が検出された。

遺物は縄文～古墳時代にわたり埴輪片も出土した。 (村田一男)

4. 次1第調査経過 (第4, 8図 図版2, 3, 4)

今回の調査目的は、八千代市少年自然の家建設地内に縄文式土器片や土師式土器片が散布しているが、そこにはたして、それらに関連する遺構が存在するかどうか、それを確認することであった。1973年6月2日午前9時、増田調査団長をはじめ調査員、その他調査関係者全員が現地集合し、発掘調査を進めるべく準備を開始した。

最初に発掘可能な地域の除草作業に取りかかる。続いて、80m×40mの少年自然の家建設地に4m四方のグリッドを図上に200個設定した。40m側は、No I～No Xまで、また80m側は、No 1～No 20までの番号を付し、個々のグリッドが一目で理解できるようにした。

建設地はその大半が斜面にかかるように選定されており、したがって、発掘可能な場所は、建設地の南西の一画である。つまり、グリッド番号でその場所を示せば、I-1～11、II-1～10、III-1～10の範囲である。調査団はこの範囲を重点的に発掘することにした。まず、図上に設定した個々のグリッドを、発掘する現地に設定。その後、時間的に制限がある今回の調査では、できるだけ労力を省くために、4m四方のグリッドを全掘せずその半分を掘る方法を採用した。つまり2m巾×44m、2m巾×40m、2m巾×40mの3本のトレンチ掘りとしたのである。したがって、各トレンチと間隔は2mとなり、大方、遺構が存在する場合ほとんどが確認できるように配慮した。また、この建設地に通じる進入路も今回の調査区域に入っていたが、ここは諸般の事情により、トレンチ法による発掘

以外はできなかった。

A区の発掘作業は、I-1グリッド側から開始した。I-7グリッドまでは、全般に層序が攪乱されていた。地元の人の言によると、かつてこの一帯は、山林やゴボウ畑として利用されていたとのことであり、現にここのローム層には大きな木根がいまだ残存していた。II・III-7までのグリッドもやはりIのグリッドと同様に攪乱の箇所が目立った。このように既掘のグリッドは、攪乱箇所が多いこともさることながら、遺構らしきものは存在しなかった。

6月4日

I-8, 9, 10グリッドの発掘に入る。この発掘区域では、地表面から深さ約80cmのところで、ある程度まとまった土器片を発見した。この土器片の周辺を清掃すると、住居址の床面とおぼしき堅固なローム層の面を確認した。さらにI-10グリッドでも住居址の壁溝と考えられる遺構を確認した。かかる状況からわれわれはこの段階で、この遺構を住居址であると断定した。また、II-8グリッドにおいては、焼土を検出したが、はたしてその焼土は位置的にみて、本住居址のものであるか、あるいは全く別の住居址のものであるか定かでなかった。

一方、この調査と併行してB区I-8グリッドからII-8グリッドを貫通するトレンチの発掘を行った。この発掘の目的は、III-8グリッドからX-8グリッドにかけて、一見人工的な斜面を呈すること、また土塁らしきものもめぐっていることなどから、一応ここに中世城郭址の存在を想定し、それらに関連する遺構が存在するかの確認であった。しかし、発掘の結果この斜面は人工的に造られたものでないことが判明した。土塁についても、もっと後世のものであることがわかった。

6月5日

A区において住居址が2軒存在することを確認した。便宜上、前日に発見された住居址を1号とし、これを2号と呼称することにした。また、I-11グリッドにも住居址の遺構であろう一部を確認した。しかしこの遺構の発掘は、調査期間との関係で第II次調査にそれを回すことにした。したがって今回の場合は第1, 2号の住居址の発掘に全力をそそぐことにした。

第1, 2号の住居址は、重複していた。出土土器によれば、両住居址は古墳時代前期の五領期に属するものであり、切り合いの関係から1号住居址の方が2号住居址より古いことがわかる。住居址はともに隅円方形のプランを呈している。1号住居址にあつては、壁

が確認されず、壁溝のみによってその全容を明らかにすることができた。2号住居址の覆土には多量の焼土と炭化材が詰っており、類焼した家屋であることがわかる。

6月9日・10日

1・2号住居址の清掃にとりかかる。1号住居址には北側壁溝に密着して、規模があまり大きくない不整形円状の貯蔵穴が付設されていた。柱穴は1個だけしか確認できず、また炉址は検出されなかった。2号住居址には、1号住居址の貯蔵穴とほぼ同じ方向に、やや方形に近い貯蔵穴を有していた。柱穴は4個、炉址は貯蔵穴の西側に検出されている。壁は割り合い垂直に近く、壁溝はめぐっていない。

一方、この作業と併行して調査員の半数は進入路のトレンチの発掘にとりかかる。このトレンチでは数ヵ所の黒い落込みを発見した。黒い落込みは、いろいろの状況から推定してほぼ住居址のようである。しかし、これらの住居址状の落込みは、今回の調査外区域に延びていて、これ以上の追究は不可能であった。なお、黒い落込みの1つから床面と考えられる堅いローム面が認められ、その直上から弥生時代後期末、すなわち前野町期に属する小形鉢形土器が完全な形で発見された。篋みがきで整形され、光沢のある土器である。おそらく、この遺構は前野町期の住居址と考えてよいであろう。また、この付近からは中期縄文式土器片が多量に出土しており、その時期の集落址の存在も想定される。中期縄文式土器は、いわゆる阿玉台期に属するものが圧倒的に多かった。

調査も終了ま近くなって、調査区域からいろいろな遺構が検出されてきた。しかし、調査期間との関連で、総ての遺構の調査は完全に果すことはできなかったが、後日本格的な調査を予定していることでもあり、精密な調査はその本格的な調査にゆずることとし、今回は遺構の確認だけにとどめることにした。(熊野正也)

5. 第2次調査経過

昭和48年7月6日八千代市教育センターにて調査国会議が開かれD地区、E地区を命名する。

7月8日調査員以下現地集合しD・E地区の調査にかかる。

D地区 (昭和48年7月8日～7月31日)(図版2, 5, 第13, 14図)

7月8日～7月11日

現地は竹林であり竹林伐採後グリッドを設定する。前回の基準抗が動いている為自然の家建設用地北東コーナーの基準抗M11すなわちI-21Gと南西コーナーのI-1Gを結んで基線としA地区と連絡して1G4m方眼のI～IV-11～18G, V～VI-18～20Gを設定

する。

全Gの第1層(表土)、第2層(黒褐色土)を掘り第3層(黒色土遺物包含層)上面を出て第1層、第2層からは遺物は出土せず。

7月12日～7月17日

トレンチ掘りとグリッド掘りを併用して第3層を掘る。但しⅢの西半とⅣ-11G, I-11, 14G, Ⅳ-15, 16Gの西半分, I-II-20G, Ⅲ-18~20G, Ⅳ-19, 20G, Ⅳ-17, Ⅴの東半分の第3層は時間上未掘である。Ⅴ, Ⅵ-18~20Gは第1層(表土)からすぐに第5層(黄褐色ローム層)となった為、Ⅴ, Ⅵ-18北半分にトレンチを入れた所第5層が段々、整形された不明確な遺構がでた。

Ⅶのグリッドの第3層下部から第4層(茶褐色土層)上部にかけては第3号~第7号住居址、野外焼土敷基、掘立柱等が検出され、遺物もかなり出土した。

7月18日～7月25日

各遺構を掘る。この結果第3号住居址は北方にもう一軒重なり、第6号と第7号住居址の東辺が建設用地外に抜がった。住居址の覆土、床面からは古墳時代を主体とした良好な遺物が豊富に出土した。

7月26日～7月31日

各遺構が掘り上がり、写真撮影と遺構実測を行い床面遺物を取り上げる。

各間や子算の関係から実際の発掘面積は全調査範囲の4分の1、遺構の完掘は第3号、第4号住居址2軒のみで他の4軒、掘立柱、野外焼土、柱穴等々は未掘であり調査過程で遺漏や不徹底はかなりある。

E地区 (昭和48年7月8日～7月15日)(図版2-1, 20, 21, 第34図)

所在地は杉林であり、崖に接して土取りされた円墳の裾部が残っていた。

グリッド設定は進入路と建設用地が接する南方コーナーを基準とし、北方向すなわち半径7.5mにa~d, 西方向すなわち長軸20mに1~8の番号を振り、2m方眼のグリッドを設定した。

a-1・3・5G, b-2・4・7G, C-1・3・5G, d-2・4・7Gの第1層(表土層)を掘り第2層(茶褐色土層)上面を出すと古墳の裾部をめぐって黒色腐殖土層が落ち込みがあり周溝と判明した。

周溝と第2層を掘り第3層(黄褐色ローム層)上面を出す。b-2・3・4Gで小さな土器が二基出土した。またd-6Gでは径40cmの柱穴が出土した。

古墳の封土を調べる為b-2~8Gを通してあげ、あわせて土壇を調査した。遺構等の実測、写真撮影を行い、E地区の地形測量を行う。

本来なら全Gの全掘をすべきであったが時間の制約からここで調査を打ち切った。

整 理

整理は昭和48年8月1日~昭和49年2月28日まで行われた。内訳は下記の通りである。

遺物整理 8月1日~9月30日

図面整理・製図 } 10月1日~12月10日

図版作成

原稿執筆 12月10日~2月28日

この間調査団は4回の会合を開き報告書作成に関し協議した。(安 達 新)

才2章 A地区

1. A地区発掘区の設定と層序

今回の予備調査は、少年自然の家建設予定地内における遺跡所在の確認が主題であることから、建設予定敷地3200㎡が調査範囲であった。調査はもともと遺構、遺物の検出が期待できる才1段丘面にA地区、才2段丘の傾斜面にB地区、さらに将来進入路となる才1段丘面にC地区を設定し進められた。

A地区は東西44m、南北12mの範囲のなかに4m四方のグリッドを設定し、南側からそれぞれⅠ、Ⅱ、Ⅲと呼称することにした。

A地区の調査は20グリッドのなかの5グリッドを選び試掘を行い、土層の状況および遺構、遺物の検出を行った。調査の経過については別項によることとするが、最終的にはA地区内をほぼ全域にわたって調査が行われた。

A地区における層序

A地区は標高16mの才1段丘にあり、全体的に東南方向にわずかながら傾斜してはいるが、ほぼ平坦地といえよう。

このようなことから、A地区における土層の状況は地点によって若干の相違はあってもおおむね同様であろうと予想された。

試掘区Ⅰ-1では表土下85cmでローム面に達したが、他の試掘区ではほぼ60cm以内でローム面に達する。この結果全体として東南方向にむかってローム層がゆるやかに流れていることが明らかになった。表土層はいわゆる耕作土で40cm程が攪乱されているが、かなりの量の土器片が混入している。表土層の下にはやや黒味の強い20~30cmの未攪乱土層があり、この土層中からは比較的まとまった形で土器片が検出されている。さらにこの土層下にローム漸移層ともいえる砂質ロームがわずかにみられ、ローム層へと続いている。

(堀部 昭夫)

2. 遺構、遺物

今回の調査において、われわれは2軒の住居址と数ヶ所の遺構(住居址と考えられる)を確認するとともに、各住居址ならびに遺構から土器が出土している。以下、遺構、遺物について、順次説明してみたい。

○遺構 (才5図、図版6)

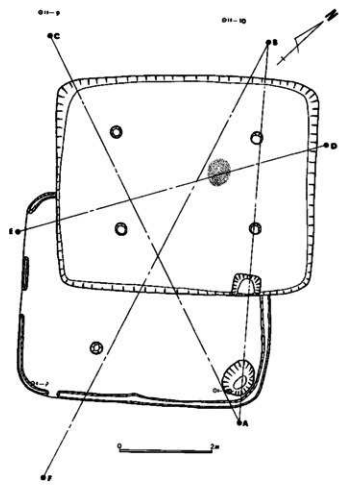
1号住居址：5m20cm×4m50cmの隅円方形のプランを呈する。壁の立上りは、認めら

011-8

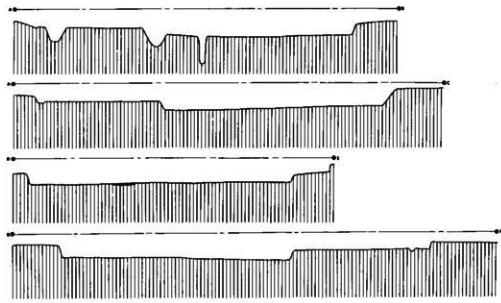
011-9

011-10

011-11



011-11



第5图 第1号2号住居址实测图

れなかったが、壁溝のめぐり具合によってこの住居址のプランを確めた。床面はほぼ中央に位置する部分が堅くなっており、四周は割り合い軟弱であった。柱穴は1個のみで、この住居の北東隅に不整楕円状のピットを付設している。おそらく貯蔵穴と解してよいものであろう。

本住居址は全体の面積の3分の1程度、2号住居址によって削りとられていて、炉址や残りの柱穴等は確認することができなかった。

2号住居址：5 m55cm×4 m70cmの規模で隅円方形のプランを呈する。面積は1号住居址とはほぼ同じぐらいである。壁面はわりあい垂直に立ち上がり、周囲には溝をもたない。床面は全般的に堅く、柱穴は4個でやや均正のとれた位置にある。柱穴の径は約20cmを計り、住居址の規模からすると小さい感じを受ける。貯蔵穴は1号住居址のものと同じ方向にあり、炉址は中央の位置より北東側に認められた。炉址の規模は、径45cm程度の楕円形を呈する。

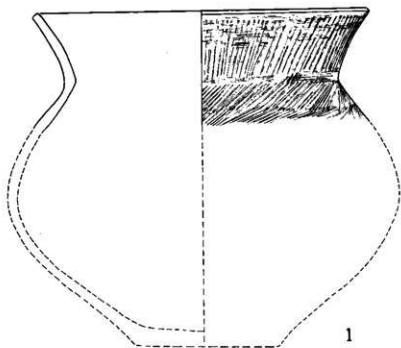
以上、1、2号住居址について、概略な説明を行ったが、これら2軒の住居址はともに同じ方向に長軸を有している。その方向を示せば、N-45°-Eである。1号住居址と2号住居址は、前述のごとく重複しているが、その切り合い関係から観察して1号住居址の方が時間的に古いことを指摘できる。また出土土器だけの比較ということになると、1、2号住居址ともにほとんど変化はなく、五領期に含めてよいものばかりである。

○遺物 (才6図)

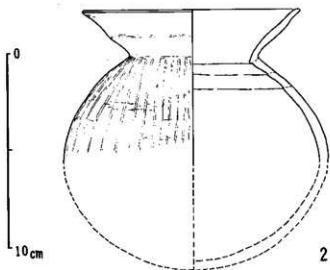
壺形土器〔1号住居址出土〕胴下半部を欠損している。口径13cm、現高4.5cm。口縁部は「く」字状に外反し、器壁は全般に薄手である。口辺部は縦方向にナデつけた痕跡があり後にそのうえから刷毛目で整形している。口縁部と胴部との内面接合部において、稜線を認める。この土器の胴部を復原すると、最大径は中央より下位に有する形を呈するようである。色調は黒褐色を呈する。

壺形土器〔1号住居址出土〕口縁部から胴上半部にかけての大きな破片である。口径17.5cm、現高5.8cm。外側の器面は、全面を荒い刷毛で整形している。口辺部はヨコナデ痕がやや薄く認められるが、内面においてはそれが顕著である。胎土には小石を多量に含み、全般にもろい器肌を呈している。口縁部は大きく外反しているが、煤状の附着物も一部に認められ、器形は胴中央部に最大径をもつ、壺形を呈するものであろう。

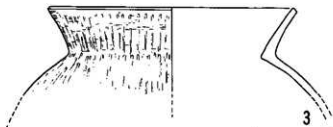
壺形土器〔2号住居址出土〕胴中央部から口縁部にかけての大きな破片である。口径11.2cm、現高8cm。器面は筧状施工具によって全面を研磨し、光沢さえおびている。胴部はほ



1



2



3

第6图 1. 第1号住居址出土土器 2. 3. 第2号住居址出土土器

は球形を呈し、底部もおそらくは丸底になるものであろう。口辺部の中ほどでは、多少のふくらみを持ち、また肩部の内面には粘土紐のつなぎ目の痕が顕著である。本遺跡で発見された土器の中では、もっとも精練されたものである。焼成は堅緻で、色調は明褐色を呈する。

住居址から出土した土器は、以上説明した3個だけであるが、いずれも床面上に密着したものであり、1号、2号住居址の年代を決定する貴重なものである。しかしながらこの僅かな土器からかなり正確な年代を与えることは無理であり、この場合は、住居址の平面形態の特徴を加味しながら大雑ばに五領期の範囲に含まれるものとしておきたい。

次にA区各グリッドより出土した土器片を拓影に表わし、順次説明していこう。A区からはおびただしい量の土器片が出土している。しかしそれらのほとんどが細片であったり、また無文のものであったりして実測あるいは拓影可能なものは、僅か10数片にすぎなかった。

○縄文式土器・1は内外面ともに貝殻条痕文がついている。しかも胎土には小石を含み、一見もろい感じを受ける。茅山式土器の範疇に含めてよいものであろう。

2～7はいずれも雲母を含み、器壁は厚い。沈線文、隆帯文などによって装飾が構成されている。これらの特徴から阿玉台式土器に含めてよいものである。

○弥生式土器・8は異条斜縄文を有する土器片である。この特徴は従来北関東地方で見られる弥生時代後期の長岡式土器に共通するものをもっている。9は口縁部が複合を呈し、その部分に縄文を付している。これもやはり印護沼周辺に多く見られるもので、長岡式土器の範疇に含めているものである。10は口縁部のみであるが、端に刻目をもち南関東地方の弥生時代後期全般に見られる甕形土器の特徴である。 (熊野正也)

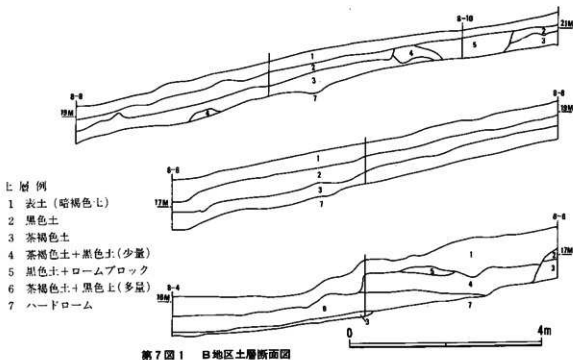
第3章 B地区

1. 傾斜面の調査 (第7図の1, 図版3-3)

本地区は、東に延びる丘陵の南側傾斜面にあたる。丘陵下は、A地点で自然の家建設地である。調査の対称となった傾斜面は、かなりの急勾配であるが、斜面上の丘陵東端に、中世館址か馬囲い状の土壘が存在することから、傾斜面が人工的に作られ利用されたものか、あるいは自然のものであるのか土層の状態を確認するためB地区とし、丘陵より下の平坦面(A地点)にかけて、1m×26mのトレンチを設定し、傾斜面における土層の観察を主目的にして調査を行なった。

丘陵上での標高は、約22m強で傾斜面には、16~20mの等高線がまわっている。なお、斜面下のA地点では標高15m前後で、丘陵頂点とA地点での比高は約7mであり、傾斜面での勾配は、約14度ぐらいである。

トレンチ発掘による結果、土層については次の様な所見を得た。第1層(30cm, 暗褐色腐植土層), 第2層(20~40cm, 黒色土), 第3層(30~40cm, 茶褐色土層)で、第4層, 第



5層、6層は攪乱層である。第7図の土層断面図に見る如く、斜面上部(8-10区~6区)では、一部攪乱されているかほぼ自然堆積層で、それより下部(8-6区~4区)では、かなり土層の堆積に変化が見られる。これは、斜面下部を削平して空堀としていたのか、窪地にした時の盛り土によるものなのか明らかではない。この土層図からすると、8-6区以下では、かなり深く自然層を削っており、第4層、第6層は上部より流入したものが、再堆積された盛り土なのか、攪乱層はA地点の接点にまでおよんでいる。

以上の結果から、本地点の傾斜面での土層は、ほとんど自然堆積層で傾斜面下方では攪乱されているが、これは傾斜面を開墾して畑地としたということである。しかし、トレンチ内のみの確認であるため、確実に開墾によるものなのか明らかではない。もし、丘陵上に中世館址が存在していたなら、自然の傾斜面を防備上、何らかの形で使用していたであろうし、傾斜面下部の攪乱部分が、空堀の役目をしていただ可能性も考えられるが、A地区での土層調査ではその事実を証明する結果は出なかった。

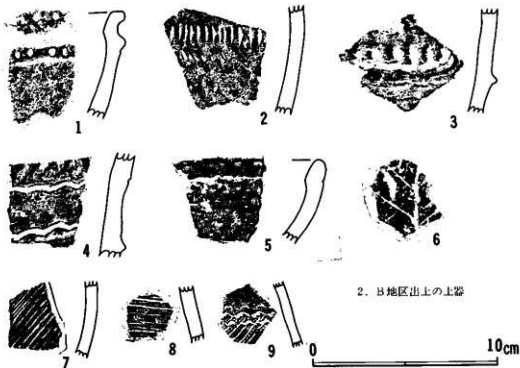
なお、本地点のトレンチ内より若干の縄文土器片や土師器片等の出土があった。これは丘陵上の平坦面より流れ込んだものと思われる。遺物については、別に説明を行なった。

2. 遺物

B地点調査のトレンチ中より若干の縄文土器片、土師器片等の出土があった。傾斜面上部よりの出土が主で、出土点数は10数片である。これは、丘陵(E地点)の平坦面から流れ込んだものであろう。その為、出土する場所も傾斜面上部のみで、斜面下方での出土は少なかった。便宜上、第1類土器、第2類土器に分けて説明を行なう。

第1群土器 (第7図2の1~5)

本類は、縄文中期前半に編年される、阿玉台式土器である。口縁部破片は2片のみで(1、2)、いずれも阿玉台式土器特有の口縁内側に稜をもち、胎土中には金雲母、石英、小礫を含んでいる。その他、断面三角形の貼付けが楕円状にまわるもの(3)、爪形文のもの(2)、沈線文のもの(4)がある。中でも、(1)の土器は口唇部に連続してまるい棒を押しつけてあり、円味の隆起線上にも同様の手法が用いられている。(5)は、浅鉢土器であろう。これらの土器は、利根川下流域に見られる阿玉台式土器と文様を同じくするが、色調、胎土が若干異なっている。色調は、茶褐色、褐色、黒色と一様でなく、胎土も純粹の阿玉台式土器と比較して、きめ細かく金雲母、砂粒、石英の混入が少ない。焼成は良好である。これらは、丘陵上に、阿玉台式期の生活の場が存在していたことが明らかであるので、斜面に流れ込んだものと思われる。



2. B地区出土の土器

第7図2 B地区出土の土器

第2群土器 (第7図2の6~9)

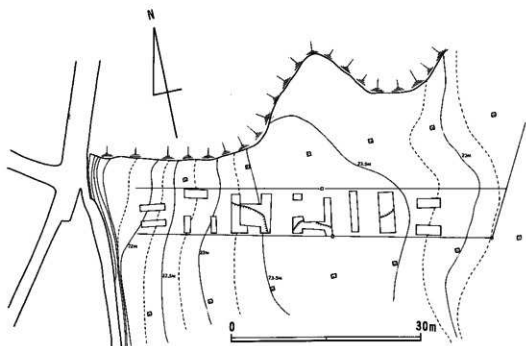
北関東系の弥生式土器に属する。時期は、弥生後期であるが、型式については明らかでない。北関東系の弥生式土器は、器面に複雑な縄文が施文され、(7, 8)ではその原体については不明である。この他、斜縄文(原体L $\begin{matrix} L^R \\ L^R \end{matrix}$)を施文した後に「結節付の縄」と呼ばれる、原体に結びめをつけ横位に回転させ、S字状の文様をつくり出しているもの(9)も存在する。なお、(6)は、本類土器の底部にみられる木葉痕である。

このような北関東系の弥生式土器は、利根川を越えて千葉県、東京都西部にも浸透しており、特に利根川右岸台地の地域では、南関東系の弥生式土器と混合しているが、土器そのものが伴出するという事例は少ない。また、北関東系土器は千葉県内において、かなり南下しており、現在では東金市や市原市付近までおよんでいる。このような中で、八千代市保品おおびた遺跡でも、若干の資料ではあるが北関東系土器の様相を知ることができる。

(中山吉秀)

第4章 C地区

1. 遺構 (第8図)



第8図 C地区トレンチ配置図

1. 調査の経過 C地区進入路は須賀の道路と建築予定地南西端を東西に結ぶ巾7.5m長さ67mの車道である。この地形は、須賀の道路際に於いては高さ2mの崖状となっており、ここを西端として東へ20mの間は標高差2mの登りとなり、ここから更に東へ21mの地点の標高23.81mまで約40cmの登りとなっている。馬背状の台地上面を見渡した限りでは、ここは謂はば平坦地の如き感のする地形である。地形図を見た際の調査方法として、進入路の中間4mを除いた両側にトレンチを入れるのが最良と思われたが、遺構が発見されたときは進入路を変更するとの案もあり、その際、自然林の状態を出来得る限り残す必要のあったため、立木の伐採を極力避け、立木間の任意の空地を調査することとなった。

この際、各トレンチ間の最小間隔は3m乃至4mとすることに注意しながら第1から第14までのトレンチを設定した。

本区に於ける遺構とは、その存否だけを目的とした予備調査であったため、すべてのト

レンチのローム上面まで掘った位置における観察の結果、認められたもののみを意味している。但し第12トレンチは一部であるが住居址床面まで掘り下げた。

2. 第1号住居址(図版3-1) トレンチ6及び7に認められた落ち込みを確認するため拡張、接続させて1つの住居址であることを認めた。ここでの遺構は隅丸胴張りのある住居址の2辺を認めた。これとても各辺の全長を認めるに至らず規模は全く不明である。

3. 第2号住居址(図版3-2) トレンチ9、10の落ち込みを第1住居址同様接続するものと見て拡張した結果、隅丸胴張りのある遺構を認めた。規模はやはり不明である。

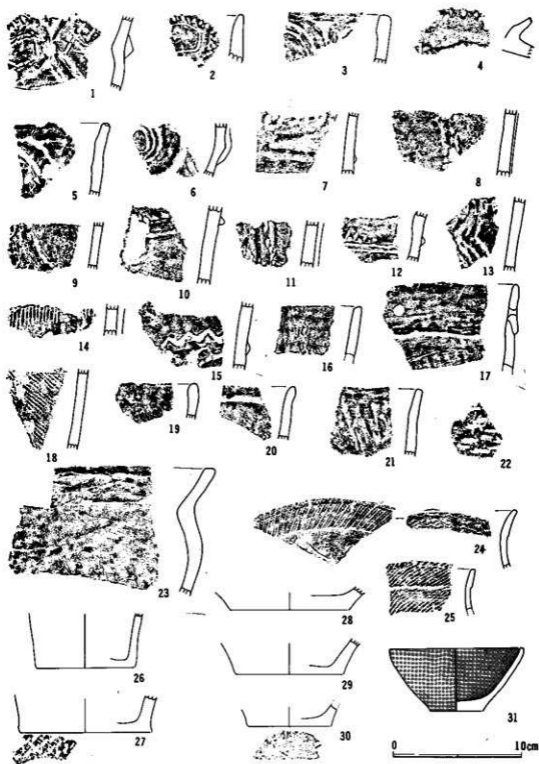
4. 第3号住居址 トレンチ12に弧状の1線を描く落ち込みを認めた。形としては住居址の胴張り部分と見られた。規模は不明であるがこの住居址のみは時期確認のため床面まで掘りさげ、ここから復原後完形となる小鉢を検出した。

5. まとめ 上述の通り遺構と云ってもローム層上面からの観察であり、加えるにその一部を認めたに過ぎず、すべては本調査の際明らかにするべきものであったが、調査範囲を大きく南方に広げなければならず、諸般の事情から本区を埋め戻して現状保存することとし、車道を他に設定したため本区遺構の全容を明らかにすることは出来なかった。今、知られた限りを挙げれば1号～3号の各住居址とも隅丸胴張りの形状を呈し、いずれも同時期の一集落に属していると思われる。3号住居址出土の土器による限り弥生時代後期の前野町期の住居址である。推定を述べれば1号住居址の大きさは認められた弧長から推して約7m×8.5m、2号住居址が1号住居址と同じ主軸をとったものとして約6m×7.5mと考えられ、3号住居址は一辺を認めただけに過ぎずこれは全く不明である。なお各住居址間の間隔は約4mと推定している。

(増田 誠 蔵)

2. 遺物

本地区は、少年自然の家に通じる進入道路であり、その敷地内に14本のトレンチを入れて調査した結果、3軒の竪穴住居址のプランの他、縄文、弥生式土器、古式土師器の各破片が出土した。また3号住居址床面直上より小形鉢1個が検出された。これらの遺物は、いずれも第1トレンチより第12トレンチ内の表土および第2層中の出土である。本地区は、木の根におおわれた山林の中であり、また、遺構確認調査という事情もあって、第3層以下については調査しなかったため遺物については明らかでない。なお、トレンチの中で第9、10トレンチ内よりは遺物の出土はなかった。遺物については、縄文土器片が主体を占め、それも縄文中期阿玉台式土器を中心としている。弥生式土器は、北関東系の長岡、十玉台式系統のものである。また、若干の古式土師器の出土があり、高杯脚部の破片や丹彩され



第9図 C地区（進入路）出土の土器

た土師器片がある。3号住居址出土の小形鉢もその一つである。その他、土玉片が1個出土している。出土した遺物は、時代別に第1群土器より第3群土器に大別した。

第1群土器（第9図）

本群は、縄文土器を一括した。型式および文様構成上、第1類から第3類に細別した。

第1類土器（16, 17）

縄文中期初頭に編年される下小野式土器の特徴を具備している。本地区では、少量の出土で、その実体については明らかでない。器形は、口唇部の内斜する口縁部破片と、口縁部の折返しをもつ口縁部破片である。いずれも、やや口縁の開く屈曲の少ない深鉢形土器である。文様は、縦方向の「結節付の縄」が施文されている以外文様はなく、表面は横ナデ整形のみられるもの（16）、複合口縁（折返し口縁）をもちその部分に補修孔を、胴部には横位の「結節付の縄」が施文されている（17）。型式としては、縄文前期末葉から中期初頭に見られるものである。

第2類土器

縄文中期の阿玉台式土器に属する。阿玉台式土器についても、何型式の分類がされているが、中でも断面三角形の貼付け文や円味のある貼付け文の時期と考えられる。古式的な様相や、扇状把手や縄文の施文される土器は見られない。文様構成上、a種からd種に細分した。

a種 本種は、貼付け文による区画内や、貼付け文に沿って連続結節沈線文で器面を飾るものである。口縁部破片が4片あり（1～3, 5）、その他は胴部破片（6, 8, 10～12）である。これらの中の口縁部破片の中で波状を呈するものは（1）のみで、（3, 5）は平縁である。（2）は、把手の部分である。また、隆起線に沿って施文されている結節沈線文の中にも同一の細い竹管工具による結節沈線文をもつもの（1, 3, 6）、異なった種類の結節沈線文をもつもの（10, 11）、隆起線の片側のみに結節沈線文をもつもの（5, 8, 12）、と竹管工具の大小により種々異なっている。なお、拓影図以外の写真図版中に2片、小突起をもつ口縁部破片があり、これもa種である。

b種（7, 9, 13） 本類は、断面三角形ないし円味の隆起線をもち、破片においては沈線や結節沈線文等の文様は見られない。これらの中には、断面三角形の隆起線（貼付け文）が、屈曲しているもの（13）、円味の隆起線のもの（7, 9）に分けられる。

c種（14, 15） 本種は、爪形文をもつもの（14）、波状沈線文をもつもの（15）である。爪形文といっても、爪の形というよりは、一定の幅と間隔をもって連続して横位に施文さ

れた幅の短い沈線文ともいえる。おそらくこの爪形文以外、他の文様も施文されているものと思われる。

D種(4, 18~21, 23) 本種は、無文土器と縄文のみの土器である。(4)は、口唇部に棒状工具の押しつけがみられるが、欠損個所が2ヶ所あり、どのような器形なのかからないので、断面は明確ではない。他の無文土器は、いずれも口縁部破片で、(19, 23)には阿玉台式特有の稜線を口縁内側にもっている。口唇部は平坦で器面内側ともよく研磨されている。(23)は、浅鉢土器の大形破片であり、胴部に一部黒斑がみられる。この他の無文土器(20, 21)は阿玉台式土器ではなく、(20)は、口唇部から見て、縄文早期の撚糸文に伴う無文土器かもしれない。また、(21)は胴部より口縁にかけて断面が狭くなっていることや、器面に縦状の砂痕が認められやや微量の繊維が混入している。型式については明らかでない。

1片のみ、縄文の破片がある(18)。原体(RL)を横位に回転したもので、胎土は阿玉台式土器に近似している。

この他、底部の出土がありその数は9点である。実測可能な4点を図示した。(26~29)これらの中に、底部にアンベラとか網代痕を有するものがある。(22, 27)。破片であるため、あみ方については追求しなかった。阿玉台式土器の底部には、このような敷物の圧痕をもつものが多い。

これら、阿玉台式土器の色調は、茶褐色、褐色、黒褐色と一様ではないが、利根川下流域に見られる阿玉台式土器に比較して色調が明るく、また、金雲母、石英、砂粒の混入は見られるものの、利根川下流域の土器とは、色調、胎土等が異なっている。これは、おそらく、本遺跡付近の粘土を利用して焼かれたものと思われる。阿玉台式土器特有に近い胎土をもっているが、黒っぽく、金雲母、石英の多量に混入する土器とは異なっていることは、前述の如く本遺跡付近において生産されたものといえる。いずれの土器も、焼成は良く粗雑な焼成の土器は少ない。

以上が、阿玉台式土器についての説明である。本地区だけの小範囲内で、100点以上の破片が出土していることを考えると、阿玉台式期の住居址の存在も考えられる。本地区において、阿玉台式土器を出土する遺跡の発見例が少ない現在、本地区の阿玉台式土器は、貴重な資料といえよう。

第2群土器 (第9図)

本群は、北関東系弥生式土器に属する、後期の長岡、十王台式と呼ばれるものであるが、現在の段階では編年的研究が充分でないので、一応北関東系弥生式後期の時期に編年される土器とした。

図示した(24)の土器は、複合口縁の変形土器である。文様は、口縁内側、口唇部、複合口縁に4本撚りの縄文(原体L| $\frac{L}{R}$)が横位に施文されている土器である。複合口縁下に、この縄文原体の末端が見られ、口縁内側には結節縄文が3条施文される。この土器の胴部にも、複合口縁と同一原体が施文されるものと思われる。(25)は、(24)と同様の土器であるが、縄文原体が2本撚りの異条斜縄文と思われる。本土器は、複合部より胴部にかけて、縄文が器面全体に施文されている。これらは、色調が黒褐色を呈し、胎土中に細砂粒を含んでいるが密で、堅く焼き上がった良好な土器である。なお、(30)の底部は本群に属するものであろう。

第3群土器 (第9図31, 図版4)

本群は、古墳時代前期の古式土師器である。図示した以外に、高杯脚部片や変形土器片等も少量出土している。31は、第12トレンチ内に確認された第3号住居址床面直上より出土したものである。器形は、小形の鉢形土器で器面の内外に赤色塗料が丹彩されている。器面はへら状工具により左から右にかけて研磨されており、焼成も良好な土器である。五領I式に属するものである。

(中山吉秀)

第5章 D地区

1. 層 序

層序は第1層表土(70~30cm)、第2層黒褐色土層(36~22cm)、第3層黒色土層(35~26cm)、第4層茶褐色土層(40cm前後)、第5層黄褐色ローム層の5層に分けられる。

第1段丘面の東西堆積は西側すなわち山側の第2段丘と接する裾部が一番堆積が激しく、東側すなわち川側にゆくにつれ次第に薄くなる。

全体として平坦面でも西から東へ僅かに傾斜し、特に第4・5層の基盤層は傾斜度が強くなる。南北の堆積は段丘の方向に沿うため平坦である。

第1層第2層は竹根が深く入り込んだ無遺物の厚い腐植土層である。

第3層は湿った暗黒色の有機質包含層であり所により厚薄が激しく、第2層から直接第4層に移る所があった。また第4層がかなり入り込み判別が難しかった。

第4層は赤茶けたやや固い層である。上部はしみ込みにより多少黒っぽくなっており、下部にゆくにつれ、次第に明るい黄褐色に変わり、第5層に漸移的に移る。

第5層は地となる固いハードローム層で、ソフトローム層は殆んどみられない。

遺構は第3層下部から切り込まれ、第4層を切り、第5層を掘り込む場合と掘り込まない場合がある。

覆土は第3層黒色土が深く入り込んでいる。全体として層の色、質の判別が難しく、第2層3層は複雑な堆積を示し、第4層も判然としない。これは斜面堆積によるものであろう。

小結 第4層はE地区の第3層茶褐色土層と同質同色であるが、時期的には同時期の生成かどうかは調査しなければ不明である。但し段丘平坦部の堆積である点、層がやや固い質であり、第5層に漸移的に移る点、縄文時代の遺物が第4層上面から出る点より第5層と共通な性格を持つ「地」の層であり、かつE地区第3層茶褐色土層とも同じような性格をもつ「二次堆積層」であると仮定できる。

2. 第3層出土の遺物と出土状態

次ページの表以外にII-11Gで形象埴輪片、IV-14Gで磨り石片、III-15、16G西トレンチで手掘器を出土する。

表の土器はいずれも遺構上面を中心として出土する。これは発掘経過で各住居址の上当たる部分で多量に遺物が出土し、遺構がない第4層上面では余り遺物が出土しないという傾向が把握されたことによる。

【D地区第3層出土土器分布表】（単位 片）

V		J 1 O 7 S 5	J 4 O 16	J 9 O 8 S 24				J 13, Y 1, O 1, S 10, J 1												
IV		J 28 O 70 S 24	J 1 O 3 H 1	J 10 O 26 S 20	J 9, Y 10, O 4, S 10			J 5 O 3 S 11												
III	J 9 O 18 S 6	J 16 Y 1 O 13	J 39 O 44 S 36	J 35	Y 1, O 50			J 8, Y 1, O 3, S 14												
II	J 6 O 11 S 25	J 1 O 20 S 6			J 9, Y 2, O 81 S 多			J 2, Y 5, O 4 S 2												
I		J 7, Y 1 O 110, H 2			J 7, Y 1 O 110, H 2			J 1 O 12 H 1												
	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21									

J……縄文時代 Y……弥生時代 O……古墳時代 H……歴史時代
S……細片もしくは不明土器片 ⊗ 未掘区 □ 出土遺物なし

全体の傾向として西側より東側の方が多く、第4号、第6号住居址附近が目立つ。また第7号住居址附近は少ない。

但し発掘中、整理過程での多少の混同はある。

縄文式土器片は総数22片で、量的に多く全面に万偏なく分布し、特にII-13, 14Gを中心として多く出土した。附近に遺構の可能性が考えられる。時期は早期～後期に亘り、早中、後期と量的に続き前期は数片である。型式では茅山期54片、阿玉台期36片、堀之内I期38片と多く、他は関山期、下小野期 加曾利E1期等の数片が出土した。

弥生式土器片は総数13で、量的に少く偏在する。特にI II-15, 16G, II-17, 18Gを中心として出土し、第6号住居址との関連が考えられる。時期は後期であり、久ヶ原期4片、長岡期が数片である。II-17, 18東トレンチでは久ヶ原期の甕胴部片と長岡期の壺口縁か同層位で出土したが、デポットであるかどうかは不明である。

土師式土器は総数52片で量的に一番多く万偏なくゆき亘るが、段丘中央から東側にかけて特に多くなり、特に第4号、第6号住居址附近は少ない。時期が判定できるものは五領期12片、和泉期数片、鬼高期数片である。他に奈良時代の須志器2片、平安時代の灰釉陶器1片等が出土、器形は甕が一番多く、高坏、壺等々が続く。

〔D地区 第3層出土遺物表〕 (WTは西トレンチ, ETは東トレンチを示す)

図章	団	通番	出土区	名称	器形	外面	内面	備考
23	10	1	W-17WT	台付甕口縁 ~胴部	口唇は押圧を施し波状を呈す。口縁は屈曲し、最大径は胴部中央にある。	口縁、横ナデ。胴部、横のへら有り。部分的に細目の刻みベラ。	口縁、横ナデ。胴部不明。	黒褐色。焼成不良。小砂含む。胴部2次焼成。
	10	2	I-15,16	台付甕口縁 1/15	口唇に押圧を施し、波状を呈す。急角度な口縁である。	口縁、横ナデで胎土は3つ重ねの粘土。	不明	赤褐色
23	10	3	III-17野外 焼土	小形埴	内湾する広口の口縁に半球状の胴部がつく。内面に稜がつき底部は小さな平底。	口縁上部、横ナデ。口縁下部、胴部はへら磨き。	口縁、刻みベラの上に横のへら磨き。胴部不明。	褐色に黒斑。内面煤附着。
	10	4	II-15,16 ET	小形埴口縁 1/7	3と同じ器形。口縁と胴部は2つ重ねの粘土で接合。	口縁上部は横ナデで下部は横、斜めのへら削りとへら磨き。	口縁、横のへら削りとへら磨き。	
23	10	5	III-15,16 WT	小形埴口縁 1/10	3と同じ器形。	口縁上部、横ナデで下部は縦のへら磨き。	口縁、刻みベラの上に横のへら磨き。	黒色~暗褐色。外面煤附着。
	10	6	III-15,16 ET	小形埴	やや立ち気味の広口の口縁に径の大きい球状の胴部がつく。底部は多少あげ底。	口縁上部は横ナデで下部は縦のへら磨き。胴部、へら磨き。	口縁、横ナデ。胴部、へら削り。	赤褐色に黒斑で荒い造り。
23	10	7	I-15,16	小形埴口縁 1/10	3と同じ器形。2つ重ねの粘土のずらしがある。	口縁上部、横ナデで下部は縦のへら磨き。	口縁、横ナデ。	紅褐色。化粧する。
	10	8	I-15,16	小形埴口縁 1/15	7と同じ。	口縁、横ナデ。	同左	7と同じ。
23	10	9	III-17野外 焼土	杯 4/5	口縁強く開き内側に稜をもちながら扁球状の胴部がつく。底部は丸底だが多平らにする。	口縁、縦、斜めの中目の刻みベラで体部は刻みベラの上にへら削り。	口縁同左。体部不明	赤褐色。焼成不良。2次焼成により所々黒斑。

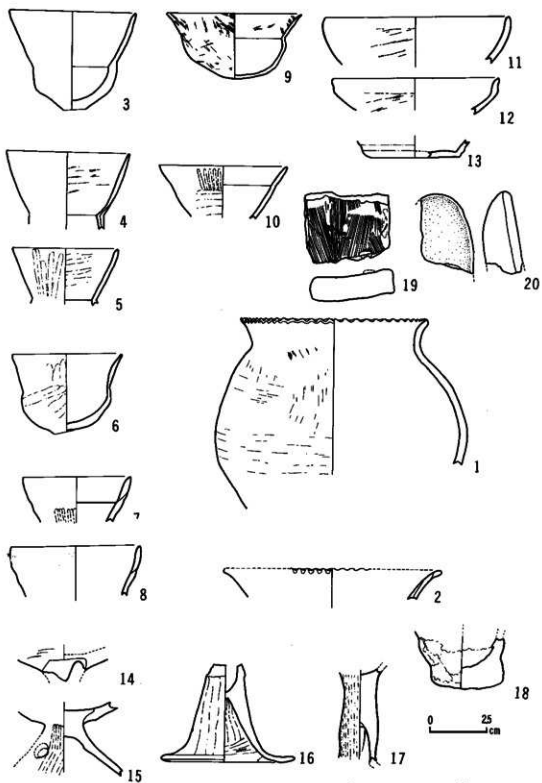
図版	図	通番	出土区	名称	器形	外面	内面	備考
	10	10	Ⅲ-12	坏口縁1/7	口縁はゆるく外反し、軽く曲って体部に続く。	口縁、縦のヘラ磨き。 体部、横のヘラ磨き。	不明	褐色。
	10	11	I-15, 16	坏 1/17	口縁は強く内湾する。	ヘラ削り。	横ナデ	褐色～黒褐色、内面丹彩される。
	10	12	I-15, 16	坏 1/9	口縁は段をなして浅い体部に続く。	体部ヘラ削り	不明	11と同じ
	10	13	I-15, 16	坏底部1/4	体部にろくろ目がつき、底は高台がつかない。	横ナデ。	横ナデ	須臾器、灰褐色の生焼き。金雲母含む。
	10	14	I-15, 16	高環の环底部	环底部は2重の粘土の貼り合わせ。突出部は3重の粘土を右に捻ったものを环底部に貼りつける。	横のヘラ削り。	不明	赤褐色。
	10	15	I-12	高環の环から脚台部の1/4	环部で弱い稜が付き、かなり開いた透孔(径1.5cm)をもつ脚台へと続く。环部の稜は胎土の接合によるもの。	ヘラ磨き	不明	紅褐色、きれいに化粧する。
23	10	16	I-15	高環の环底部から脚台部にかけて	坏を受ける脚台接合部が明瞭に残る。急角度の脚台で裾で強くはねる。	坏部に縦のヘラ整形。 裾部は横ナデ。	脚台に粘土の右捻じり痕。裾は横のヘラ削り。	赤褐色～褐色小砂まじる。輪積み痕所々みられる。
	10	17	II-17, 18 ET	高環脚台部	棒状の脚台部である。	縦のヘラ磨き	ヘラ削り	紅褐色 化粧する
23	10	18	Ⅲ-15, 16 WT	手捏土器 口縁欠失 环形	コップ形を呈す。径3cm×高さ2cm以上×器厚5cm。	指頭整形と中目の縦の刻みベラ。底部はヘラ削り。	粘土の垂れ下がる輪積み痕。	褐色。輪積みで形を造り、指頭を主として刻みベラ整形を使う。
24		19	II-11	形象埴輪片、上下欠損	巾7.5cm×厚さ2cmで板状を呈す。右下に棒による径1cmの穿孔があり粘土が上にはみ出る。	表裏に巾1cmの縦の櫛目を施す。西側に多少みられる。		赤褐色 焼成胎土 良好

図版	図	通番	出土区	名称	観察	備考
24	10	20	Ⅲ-14	磨り石片	底面は平らで上面は丸く磨滅する。 石質は安山岩	

D地区 第3層出土土器拓形表

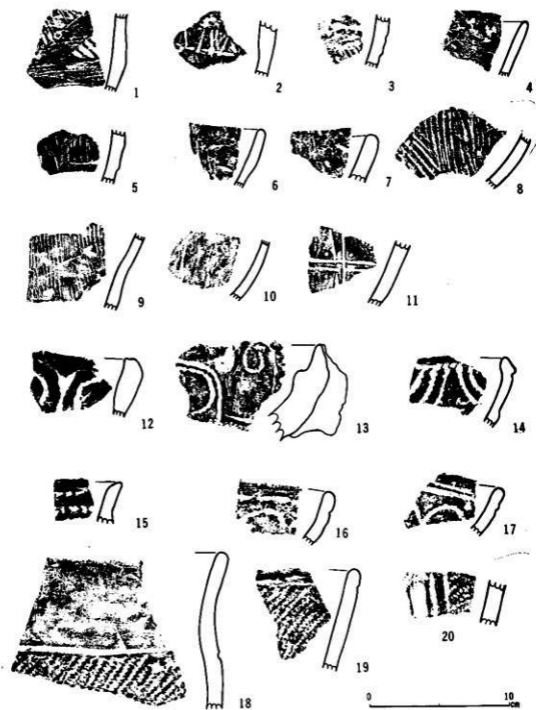
図版	図	番号	出土区	部位	文様(整形)	胎土焼色等	時期
25	11	1	Ⅳ-13	胴部	竹管による円形文と沈線	繊維含む黒褐色	鶴が島台
25	11	2	Ⅱ-12	"	"	" 茶褐色	"
25	11	3	Ⅲ-15, 16 WT	口縁附近	"	" 黒褐色	"
25	11	4	Ⅳ-17WT	口縁	無文	" 茶褐色	?
25	11	5	Ⅳ-17WT	胴部	貝殻条痕文	" 黒褐色	茅山下
25	11	6	Ⅳ-17WT	口縁	無文	繊維含む茶褐色	?
25	11	7	Ⅱ-17ET	"	"	"	?
25	11	8	Ⅳ-14	胴部	貝殻条痕文	"	茅山下
25	11	9	Ⅱ-17, 18 WT	"	"	"	"
25	11	10	Ⅲ-15, 16 ET	"	貝殻腹縁文	"	"
25	11	11	Ⅱ-15, 16 ET	"	円形竹管文と沈線	褐色	関山
25	11	12	Ⅳ-13	口縁	連続半截竹管文	雲母含む黒褐色	阿玉台
25	11	13	Ⅱ-17, 18 ET	"	"	" 茶褐色	"
25	11	14	Ⅱ-15, 16 WT	"	"	" "	"
25	11	15	Ⅱ-14	"	"	" "	"
25	11	16	Ⅱ-11	"	"	" "	"
25	11	17	Ⅱ-15, 16	"	"	" 褐色	"
25	11	18	表板	"	縄文に沈線	褐色	加曾利EⅢ
25	11	19	I-15	"	"	焼成不良 褐色	加曾利EⅡ
25	11	20	Ⅱ-17, 18 WT	"	縄文と磨り消し	黒褐色	加曾利EⅡ
26	12	21	Ⅱ-11	"	縄文と沈線	茶褐色	堀之内I
26	12	22	Ⅱ-13	"	"	"	"
26	12	23	I-15	"	"	黒褐色	"
26	12	24	Ⅱ-14, 15	"	"	"	"
26	12	25	Ⅱ-13	"	"	赤褐色	"

図版	図	番号	出土区	部位	文 様 (整 形)	胎土焼色等	時 期
26	12	26	II-17,18 WT	口 縁	縄文と沈線	茶褐色	堀之内 I
26	12	27	II-19	刷 部	刺突と沈線	黒褐色	"
26	12	28	II-13	口 縁	縄文と沈線	"	"
26	12	29	I-15,16	"	斜縄文	"	"
26	12	30	II-15,16 E T	"	"	茶褐色	"
26	12	31	II-14	"	"	黒褐色	"
26	12	32	II-14	"	"	"	"
26	12	33	I-17,18	甕 胴 部	叩き目 (須恵器)	灰褐色	平 安
26	12	34	I-15	把 手	連続刺突文	茶褐色	久ヶ原
26	12	35	II-17,18	甕 刷 部	輪積み跡	黒褐色	"
26	12	36	II-11	複合口縁	斜縄文	"	下小野 ?

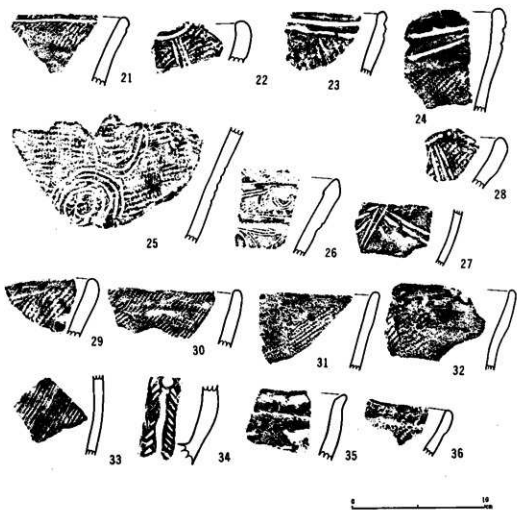


第10图 D地区第3层出土物实测图

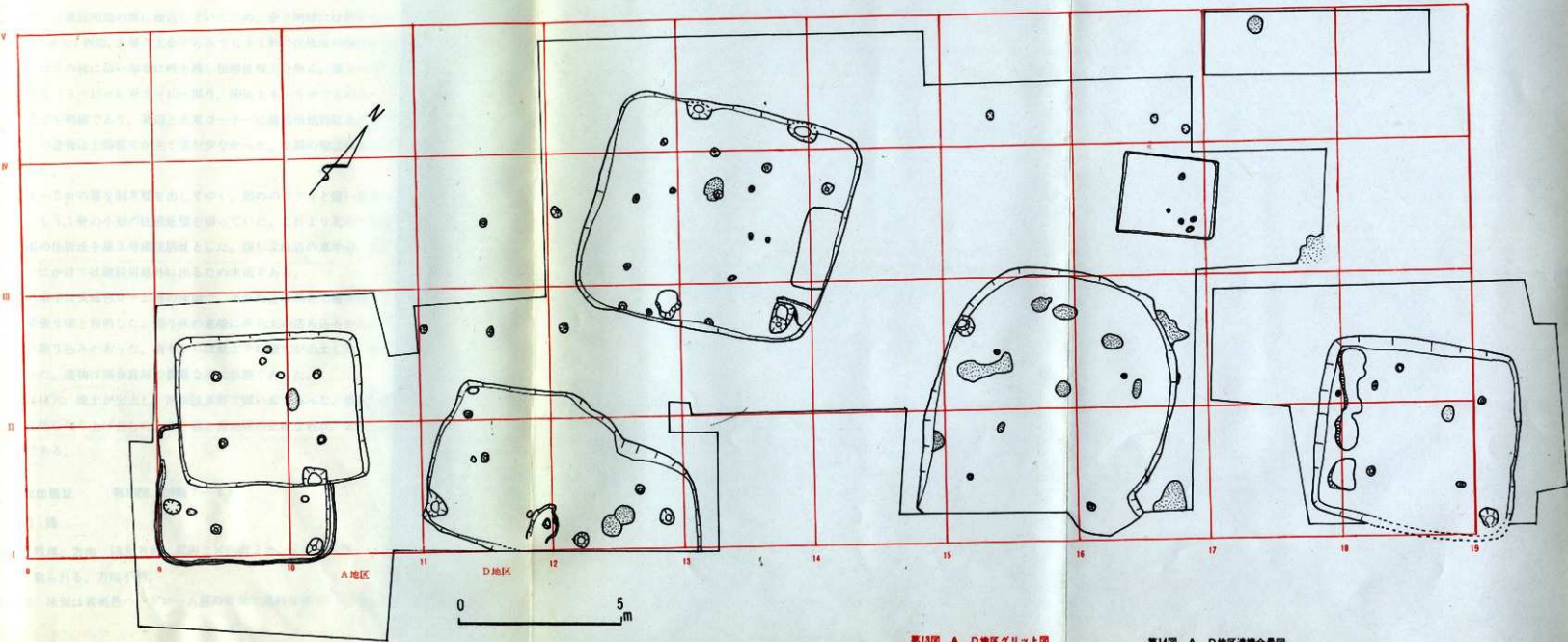
0 10 cm



第11图 D地区第3层出土土器拓影图



第12图 D地区第3层出土土器拓影图



第13図 A、D地区グリッド図

第14図 A、D地区遺構全景図

3. 遺構と遺物 (図版2, 第14図)

第3号北・南住居址

(1) 経過 (図版7-2, 3) 第3号住居は第1次調査で南東コーナーが検出されていた。このコーナーを追ってI, II-11, 12Gの第3層黒色土層を20数cm剥ぐと、第4層茶褐色土層を切って第3層の落ち込みがあった。

落ち込みは西辺3.5m×東辺5m×高さ5mの台形状のプランをなしていた。但し東辺とそのコーナーは建設用地の境に接近していたため、余り明確には把めなかった。プランが不整形な点、東辺、西辺、土層の工合からみてもう1軒の住居址の複合を考えた。

II-11, 12Gの線に沿い南北に畔を残し住居址覆土を掘る。覆土の黒色土(40m)を剥ぎ、暗褐色土(5~15m)を5~10m掘り、床面上4~5mで止める。

北辺附近は不明確であり、東辺と北東コーナーに建設用地外に入り込み末掘である。

覆土からの遺物は土器破片が主で量が少なかった。土器の他に剣形石製品、緑泥片岩石片が出土した。

床面上4~5mの層を剥ぎ壁を出してゆく。始めのプランと違い北西コーナーはグラダラと曲り、もう1軒の小形の住居址壁を切っていた。これより北の住居址を第3号北住居址とし、南の住居址を第3号南住居址とした。但し北住居の東半分、南住居の東辺から北東コーナーにかけては建設用地外に出るため末掘である。

南住居の南半分は黄褐色ローム層の床面で、北部附近は黒色土層が混り不明確であったが、調査の結果張り床と判明した。張り床の東端に黒色土の落ち込みがみられたので、掘ると、柱穴と浅い掘り込みがあった。南半分からは焼土や貯蔵穴が出土した。柱穴は精査したが数は少なかった。遺物は割合良好で豊富な出土状態であった。

北半では柱穴、焼土が出土し、床面は良好で固い面であった。遺物は量が少なく時間上かなり不正確な取り上げをした。北住居と南住居の正確な形状、切り合い等は全掘しなれば不明である。

第3号北住居址 (第15図, 図版7-1)

(2) 遺構

プラン、規模、方向 隅丸方形。北辺2×西辺2m。北西コーナーのみ発掘、南半分は南住居に削り取られる。方向不明。

床面、壁 床面は黄褐色ハードローム層の堅微で良好な面である。壁高50cmで垂直に立

ち第4層茶褐色土層を切り込み、第5層黄褐色ローム層を僅かに掘る。

炉址 F4である。東側長径60cm、南側長径50cm、厚さ10cm。楕円形の2基が連結した状態で出土。床面は明確に焼ける。

柱穴 2口出土。

P5 不整形円形尖底、径30×深さ20cm。

P6 円形平底、径20×深さ12cm。

床面遺物出土状態 床面からは弥生式土器の小片が3片出土した。

小結 時期は遺物の取り上げ時の不正確さや末掘部分もあり判然としないが、住居址の切り合い、床面近くの出土遺物を考慮して第3号南住居前の長岡期～五領期と考えておく。規模は発掘経過、張り床面、プランを考え、西辺にもう2m南方へ拡がり計4mとなり、1辺4mの隅丸住居址が考えられる。

P1、P2が本住居に層するかどうかは不明。

(3) 遺物

概記

土器類(単位片)

出土層位	数	評 別		通 番	
床面直上	3	Y-3	縄文2、底部1	1	
床面近く	22	J-2	阿玉台期1、S1		
		O-10	甕3、壺4、壺か甕1、小形埴1、S1		
覆 土	36	S-10	阿玉台期、加曾利E期等々	2~4	
		J-10			
		Y-1			壺1
		O-15			甕9、壺2、小形埴1 高坏か器台2、S1

第3号 北住居址遺物出土表

図順	通番	名称	器形	外面	内面	備考
	17	1 小形 埴 胴部	径は復原径の為 不正確	横のへら磨き。	不 明	赤褐色。 煤少しつく。 風化する。
	17	2 高坏脚台 部 1/10	透孔がつく小形 の脚台。	縦のへら磨き。	不 明	赤褐色。
	17	3 甕口縁部 1/8	口縁は2つ重ね の粘土でつくら れた厚いもので くの字形に外反 し、薄い胴部が 続く。	口縁、横ナデ。 胴部、刻みペラ の上にへら磨き。	口縁、不明確な 刻みペラ。 胴部、横のへら 削り。	黒色。 炭化物附着。
	17	4 甕底部 1/2	平底。	底部は巾1cmの へら削り。 底部附近は縦の へら削り。 縁を横方向に調 整。	不 明	黒褐色。

第3号南住居址 (第15図, 図版7-1と8, 9)

(2) 遺構

プラン, 規模, 方向 西辺5×南辺4.3×東辺現在長2.6×北辺復原長4m。主軸N 60° E。北辺, 北東コーナーを欠く。北西コーナーは切り合いの結果グラグラとしている。

床面, 張り床 床面は黄褐色ローム層でやや軟かく平滑な面をなさず凹凸がある。西側と東側の比高差は10数cmもあり, 東側に高く, 西側に低くなってゆく。張り床は北側3mの範囲に三角形に広がる。これは地山面を10cm程垂直に切り地とし, 黄褐色ローム層と黒色土層を半々に混ぜて造り上げたものである。

壁 壁高30~50cm。西辺が高く東辺が低い。立ち上りはやや丸くなる。南東コーナーは黄褐色ローム層で西側にゆくに従い, 茶褐色土層に漸移する。

柱穴 4口出土。

P1 円形平底, 径40×深さ13cm, 張り床上に覆わず。

P2 不整形, 縦120×横80×深さ10cm, 中に2口の柱穴が斜めに掘り込まれる。1口は不整形丸底径20×深さ15cm。1口は不整形丸底径30cm, 張り床上に覆う。

P3 円形丸底, 径24×深さ20cm。

P4 円形丸底, 径40×深さ10cm。

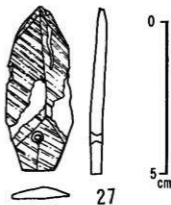
貯蔵穴 南東コーナーにある。楕円形丸底, 長径90×短径70×深さ20cm。周囲に径8mmの副柱穴が3口附属する。

炉址 3基出土, 床面焼ける。F1 方形, 20×厚さ8cm。F2 三角形, 20×14×厚さ10cm。F3 円形, 30×厚さ10cm。

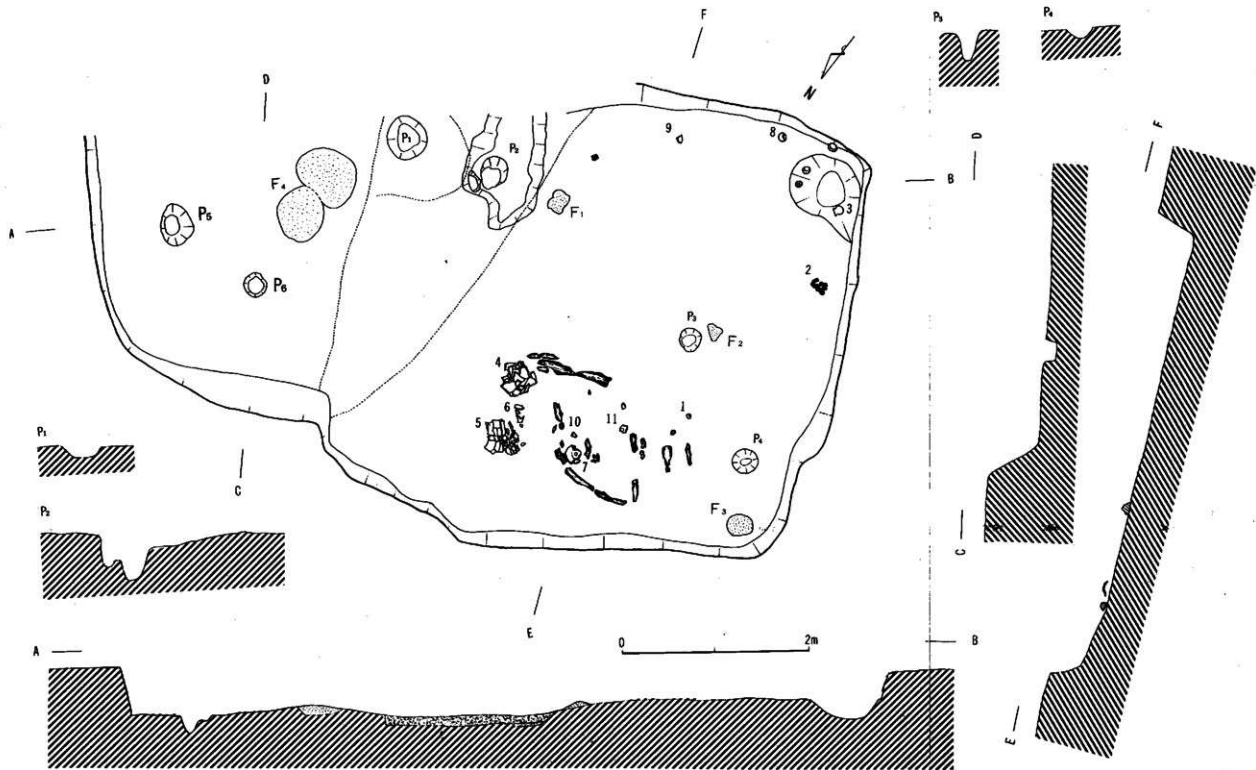
床面遺物出土状態 全体として貯蔵穴周辺と西側部分が多い。貯蔵穴内部斜面に横倒しになって小形壺(3), その外側にやや傾いて小形壺(8)及び粉碎された火山岩滓(2)が出土。西側部分では床上4cmの間に一番多く出て横倒しに押し潰された完形の甕(4, 5), 他に高坏(6, 7), 鉢(10)小形埴(11), 土玉(1)等々が出土した。

木炭は床面に密着し東側にも1片出土したが, 西側部分に遺物等々と一緒に多く出土した。ここでは短く小さな破片が西辺に垂直に交わる方向に並ぶものと, 長く大きなものが西辺に平行に並ぶものがあった。断面は半円で上面は本来の自然面をみせる。

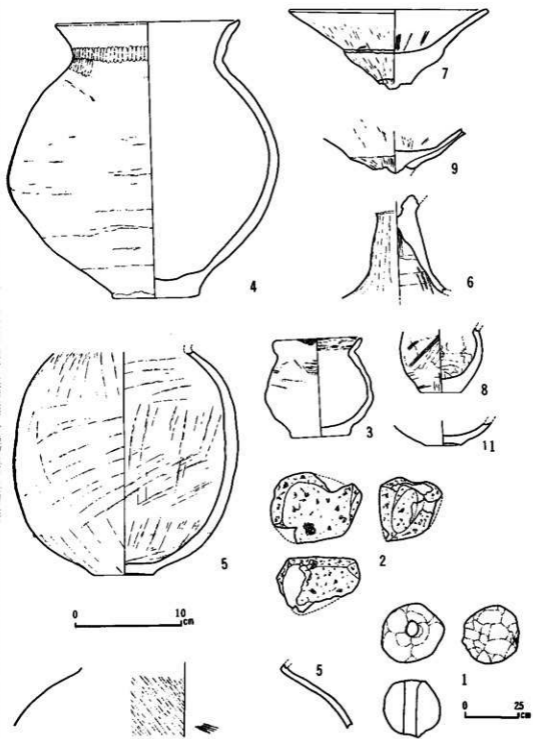
小結 張り床は第3号南住居が第3号北住居を切る際に第3号北住居の床面を壊って改めて補修直したものと推定した。第3号北住居の床面が第3号南住居より多少高くなっている点は注意される。P1, P2はどちらの住居に属するか不明。



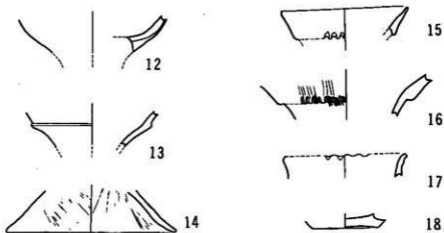
第18図 第33南住居址
覆土出土剣形
石製品



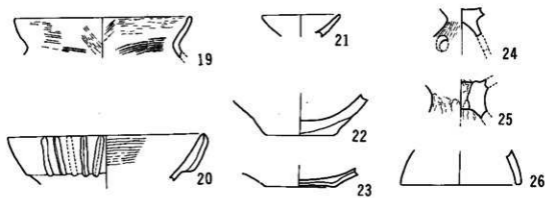
第15图 第3号北·南住居址实测图



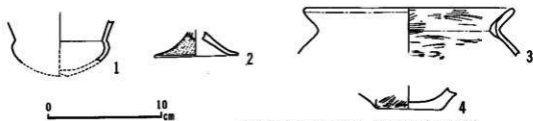
第16图 第3号南住居址床面出土物实测图



第3号南住居址床面近く、出土遺物実測図



第3号南住居址覆土出土遺物実測図



第3号北住居址床面近く、覆土出土遺物実測図

第17图 第3号北、南住居址出土遺物実測図

(3) 遺物

概記

土器類 (単位片)

出土層位	数	詳 別		通 番
床 面	11	11	甕3, 小形壺2, 高环3, 鉢1, 小形埴1	3~11
床面近く	24	J-6 O-18	茅山期2, S4 甕6, 台付甕1, 壺3	12~18
覆 土	84	J-18	器台2, 高环5, 高环か器台1	28, 30
		Y-3	茅山期4, 加曾利E期2, S12	
		O-34	長岡期1, 底部1, 甕口縁1 甕20, 壺3, 小形埴1 器台5, 高环2, 环1 粘土塊2	29 19~26
		S-29		

その他 (石製品, 鉄製品, 土製品の類 単位点)

床 面	1	土製丸玉	1
"	1	火山岩滓	2
覆土(黒色土)	1	剣形石製品	27

第3号南住居址出土遺物表

図版	図	通番	名称	観 察			備 考
28	16	1	土製丸玉	径2.6mmの球の玉。中央に径0.6cmの穿孔。 重さ17.5g。中目の刻みペラの上にヘラ整形を全面に施す。 褐色, 部分的に灰黒色, 焼成は良く堅い。			
28	16	2	火山岩滓	縦8.3×横6.5×長さ5.3cm。重さ38g。摩耗により石鹼形に近い不整な立方体を造る。稜は柔かな稜で構成され, 面は凹滑である。表面は褐色, 地は黒色で海綿状組織をなす。			普通スコリアと言われる。
図版	図	通番	名称	器 形	外 面	内 面	備 考
27	16	3	小形壺	内湾ぎみの口縁に中央に最大径がある球状の胴部がつく。底部は丸味を帯び平底である。	口縁, 中目の刻みペラ。 胴部, ササラ状。 底部, ヘラ削り。	口縁, 細目の刻みペラ。 胴部不明。	輪積み後に指頭整形。厚手で無滑。褐色, 小砂含む。

図版	図	通番	名称	器形	外面	内面	備考
27	16	4	甕	口唇に稜がつき内面は削られる。口縁はやや外反し中ほどでふくらみ、中央に最大径がある胴部がつく。底部附近はまくれ上り、平底となる。口縁と胴部の接合痕あり。	口縁、横ナデでその下は巾3mmのヘラ磨き。胴部、横斜めのヘラ削りで輪積み痕あり底部、ヘラ削り。	口縁、荒い横ナデ。胴部不明。	赤褐色に褐色斑。内面は黒褐色、焼成良好。胴部に煤。
27	16	5	甕 口縁欠損	胴部は張らず炭消し壺に近い器形。底部は多少あげ底。	巾1cm前後の縦、斜めの横のヘラ削り。底部、ヘラ削りで横の棒状器具押圧痕あり。	同 左	黒褐色に赤褐色斑。二次焼成が部分的にあり。
			壺胴部1/6	大きく広がる胴部らしい。	胴上部、横ナデで下部は斜めのヘラ磨き。	不明	濃褐色。整形から壺とみた。
27	16	6	高環脚台部	環を受ける脚台接合部が良好に残る。脚は太くやや広がる。	3~4cm巾の縦のヘラ整形。	上部に捻り痕。下部は荒い整形と輪積み痕。	赤褐色に黒色斑。
27	16	7	高環環部	口唇は外屈し稜がつく。体部は外反し強い段を造り、丸く脹らんで底部へ続く。下部突起がみられる。	口縁、横ナデで体部は縦のヘラ削り。	口縁、横ナデ。体部、刻みべらの上にヘラ削り。	赤褐色。胎土焼成良好。
27	16	8	小形壺 口縁欠損	ゆるく張る胴部に、厚手の平底がつく。	胴部、中目の刻みべらの上にヘラ磨き。底部附近、ヘラ磨き。底部、荒いヘラ削り。	指頭による押圧痕と横のヘラ削り。	褐色。焼成普通。胎土不良。
	16	9	高環環部 1/3	体部にゆるい稜を造り、底部に突起がある。2つ重ねの粘土で造られる。	ヘラ削り。	ヘラ削り。	赤褐色。

図版	図	通番	名称	器形	外面	内面	備考
		10	鉢口縁	内屈し、内面に段がつく無文の口縁。			縄文式ニ器、小砂、雲三含む。
	16	11	小形増底部	丸く小さなあげ底。	底部附近、ヘラ磨きで底部ヘラ削り。	同 左	化粧チ、褐色。
	17	12 14	高環部と脚裾部	13は体部に段をつくり12はつくり14はつくり14の脚裾部は反らない。	12, 14, ヘラ削り。 13, 横ナデ。	12, 14ヘラ削り。 14は捺り痕あり。 13, 横ナデ。	12, 黒色。 13, 赤褐色で化粧を、煤附着。 14, 赤褐色、焼ける。
	17	15 16	壺口縁1/5 壺口縁1/10	貼り付けによる複合口縁下部は押捺を施し、波状をなす。	15, 横のヘラ磨き。 16, 縦の刻みペラの上に縦のヘラ磨き。	15, 横の刻みペラの上にヘラ磨き。	15は黒褐色。 16は白褐色、胎土焼成不良
	17	17	壺口縁1/15	口唇は外屈し押捺による波状を呈す。	横ナデ。	刻みペラ。	赤褐色。
	17	18	壺底部	あげ底。	ヘラ削り。		淡褐色。
	17	19	壺口縁1/15	口唇は内屈し口縁は内湾する。	刻みペラの上に横ナデ。	上部ササラ状。 下部巾1.5cmの刻みペラ。	褐色。
	17	20	壺口縁1/8	やや内湾する複合口縁に巾6mm厚さ5mmの棒状粘土を貼り付ける。	口縁下に縦の刻みペラ。その上にヘラ磨き。	横のヘラ磨き。	淡褐色。
	17	22 23	壺底部	22, 平底で2つ重ねの粘土。 23, あげ底で2つ重ねの粘土。	22, 23ヘラ削り。	同 左	22, 赤褐色。 23, 褐色。 焼成不良。
	17	21 25 26	器台受部 器台接合部 器台脚裾部	21は小形 25は2cmの貫通孔あり。 26は内湾する。	21はヘラ磨き。 25は指頭による 26は不明。		21, 25, 26 褐色。
	17	24	高環接合部	脚台に透孔あり。	縦のヘラ磨き。	不 明	赤褐色、化粧する。

図版	図	通番	名称	観 察	備 考
28	18	27	剣形石製品	長さ5.5×巾2.2×厚さ0.4cm。 一部欠損する。表面は斜方向の擦痕により稜をつくる。 表面は平坦で自然面が多くみられる。断面は中央部 で厚くなり、側面は縦に擦る。 先端は数方向から擦られ、先を尖らせる。 下部中心に径3.5cmの孔がある。両面から回転によ り穿孔する。	滑石片岩製 墨黒色。
33	33	28	刷 部	文様は撚糸文 褐色	時期不明
33	33	29	壺 刷 部	無文と羽織文 黒褐色	長岡期
33	33	30	深鉢口縁	貝殻条痕文 茶褐色	茅山下層期

第4号住居址 (第19図, 図版10~13)

1 経過 II, III, IV-12, 13, 14Gの第3層黒色土を20cm下げると、第4層茶褐色土層を切り込んだ黒色土の落ち込みがみられた。これは南北7.2×東西6.1mの方形状をなす大きさのものであった。

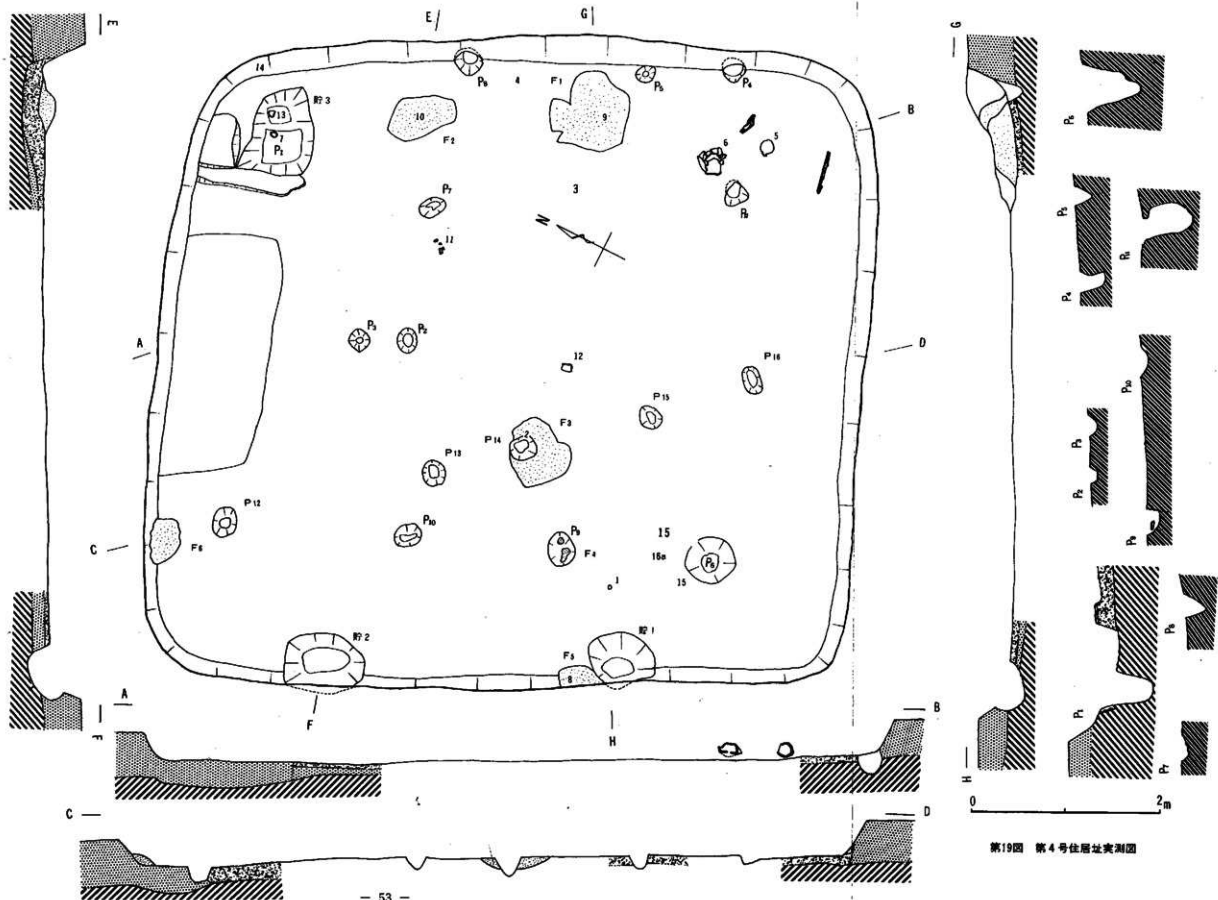
東西II, III, IV-13線と南北IV-12, 13, 14線の十字畔を残し覆土第1層黒色土30数cmと第2層暗褐色土層10cmを掘り下げ、床面上4~5cmのローム粒まじり暗褐色土層を削り、第2層暗褐色土層を削ぐ段階で東西畔の東端に畔をまたいで壁際に焼土の大きな塊がみられた。また東北の壁際にも焼土が出土していた。

第1層黒色土下部からは西辺附近を中心として甕2個、壺1個が出土した。この甕(6)、壺(5)は床面出土のものであった。第2層暗褐色土層からは十字畔中央西寄りに横位の粗製小形土器(16a)と三角形土製品(15)が近接して出土した。また軽石(3)も柱穴6付近で出土した。覆土の土師器片は非常に良好で多量に出土した。また縄文土器もかなり出土し、特に東辺中央附近を中心とした流れ込みが目立った。弥生式土器はさほどの量はなかった。

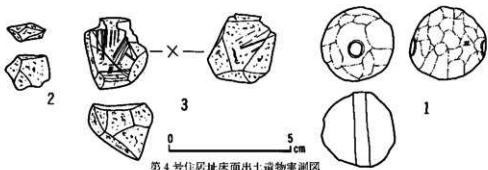
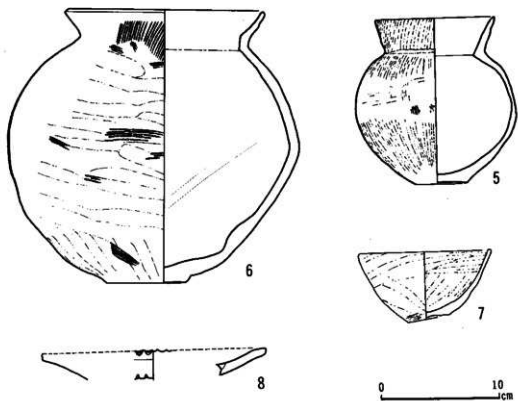
次に床面、壁の検出にあたったが、切り込まれた第4層茶褐色土は赤黒味を帯び、乾然としなかったので、床面と壁を掘る前に十字畔に沿い小トレンチを入れた。この結果壁は第5層を切り込まず第4層のみで形成され、床面に張り床を構築していることが解った。

次に十字畔をはずしたが、この際前記の東西畔をまたぐ壁際の焼土塊を露出させた。この焼土塊の掘り方は難しく、一応焼土の周囲にある黒色土、暗褐色土層をはずした。従って壁と焼土塊の間を埋めるローム粒混じりの暗褐色土層と焼土の西端と床面を埋める暗褐色土層をともにはずしてしまった。これは後で判明したことだが、明らかに発掘上のミスで、階段状遺構の一部をなすものであった。

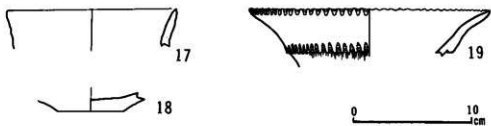
床面上4~5cmのローム粒まじり暗褐色土層を下げ床面と壁を出した。床面は全面張り床のため、凹凸が激しく、床を張った部分と張らない部分が入り乱れ作業に困難をきたした。従って張り床を張った明確な部分を手掛りとして、張らない不明確な部分を水平に追う方法を取った。壁もかなり難行を極めたが、黒っぽく柔かい覆土とやや赤く固い壁を目安として追ってゆき、殆んど原形に近いカーブを露出させた。床面からは前記の焼土塊の他に4カ所の焼土と3カ所の貯蔵穴、10数本の柱穴、段のないベット状遺構が出土した。柱穴検出は数回の精査を行ったが、床面の状態からまだ遺漏もあり得る。床面出土の遺物は割合豊富であった。最後に床面、壁を部分的に立ち割り、その構造を調べた。



第19图 第4号遗址平面图

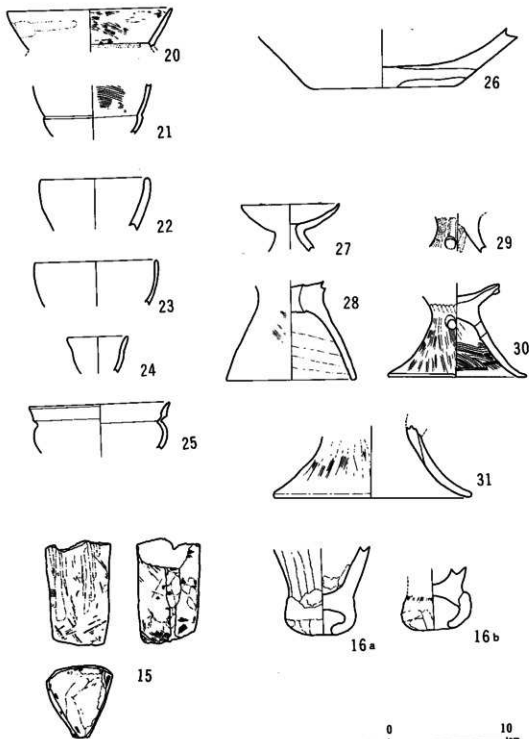


第4号住居址床面出土遺物実測図

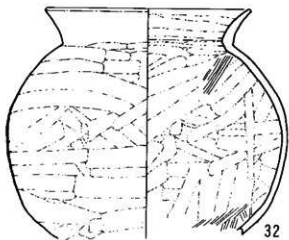


第4号住居址床面近く出土遺物実測図

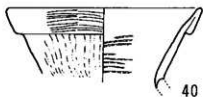
第20回 第4号住居址床面，床面近く出土遺物実測図



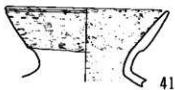
第21图 第4号住居址覆土出土遺物実測図



32



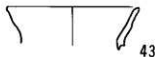
40



41



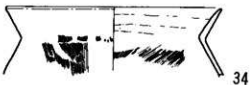
42



43



33



34



35



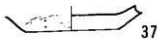
44



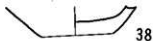
45



36



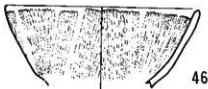
37



38



39



46



47

第22图 第4号住居址覆土出土遺物実測图

0 10
cm

2 遺構 プラン、規模、方向 隅丸方形、東西6.1×南北7 m。主軸N60°E。保存状態は非常に良好である。全体としてゆがみが少しあり、平行四辺形に多少近い。四辺は整然とし崩れた部分やゆれがなくほぼ原形に近い形状と考えられる。

床面 張り床構築である。張り床面はテカテカ光った固くやや暗い黄褐色土面である。張り床の厚さは平均4～6 cm、厚い所で10～26 cmで、住居断面C—D線附近と壁際が厚くなる傾向がある。張り床上面は黄褐色ロームを薄く張り固め、その下に黄褐色ローム混じり黒色土を2～4 cmの厚さで詰め込んでいる。床面全体は水平であるが、張り床をする部分、しない部分が入り乱れ、凹凸やムラが多い。踏み固めのある部分は住居中央附近が主で東辺中央から西辺中央にかけての東西巾が目立つ。踏み固めのない部分は住居隅辺が主で特に北辺、南辺附近が目立った。張り床の地の部分は第4層茶褐色土層下部(6～14 cm)がくる場合と直接第5層黄褐色ローム層がくる場合がある。第4層下部は張り床や第5層よりは赤黒く、第4層上部よりは明るい柔かな層で、第5層のソフトロームとからみ第5層に漸移的に移行する層である。

壁 壁高26～46 cm。東辺壁高40数 cm。南、北辺壁高30数 cm。西辺壁高20数 cm。壁巾平均20 cm。保存状態は非常に良好である。断面は柔かな線で構成され、やや内湾しながら斜行し丸味を帯びた鈍角な立ち上りとなる。壁の上端、下端はふれがなく、平均した良好な線である。第4層茶褐色土層のみを壁とする赤茶けた固い面である。

周溝 東辺、南辺の一部にみられる。東辺U字状、巾25×深さ20 cm。西辺U字状、巾24×深さ20 cm。東辺覆土は黄褐色土が僅かに混じる黒色土で、ハードロームにまで切り込んでいる。西辺覆土は炭片まじり暗褐色土でハードロームまで切り込む。これは壁と床面を立ち割った時、断面をみて明らかとなったもので、上部は床面から壁への明確な立ち上りが一応把握された所である。

焼土 6カ所出土。(番号はその附近の焼土を示す。)

- F1 不整円形、縦横85×厚さ22～36 cm。焼土粒、焼土塊と暗褐色土、黒色土がまだら状に混じる。床面は焼けず、拾灰であり、階段状遺構の主部である。
- F2 楕円形、縦74×横44×厚さ18 cm。焼土塊、炭片混じり暗褐色土である。床面は焼けず拾灰である。
- F3 不整円形、縦70×横64×厚さ2 cm。床面は焼け、ガリガリとしたブロック状になる。
- F4 柱穴9の上部に2カ所含まれる。径6 cmと16 cmの2つで厚さ2 cm。地は焼けている。
- F5 不整円形、縦20×横46×厚さ10 cm。壁部に密着する。炭片、焼土混じりの黒色土で

拾灰である。

F6 不整円形、縦30×横46×厚さ9cm。炭片、焼土混じりの黒色土。拾灰である。

柱穴 15口出土。

P2 円形、平底、径17×深さ8cm。

P3 方形、丸底、径23×深さ9cm。

P4 隅丸三角形、丸底、径23×深さ29cm、斜めに入る。

P5 不整円形、尖底、径20×深さ18cm。

P6 円形、二段丸底、径53×深さ60cm。

P7 楕円形、平底、径26×深さ8cm。

P8 不整円形、尖底、径24×深さ24cm、斜めに入る。

P9 不整円形、底末掘、径28×深さ14cm。

P10 不整円形、丸底、径32×深さ10cm。

P11 隅丸長方形、丸底、径25×深さ54cm、斜めに入る。

P12 隅丸方形、平底、径24×深さ13cm。

P13 円形、尖底、径21×深さ12cm。

P14 隅丸方形、尖底、径28×深さ20cm。

P15 不整円形、丸底、径20×深さ14cm。

P16 隅丸長方形、尖底、径18×深さ8cm。

P6の最初は径20cm、深さ10cmの小さなものであった。しかし壁面が張られているため、その面をはずし、広げてゆくと図のような柱穴の「掘り方」が検出された。この時の壁面は黄色く明るみを帯びた固い面となった。

貯蔵穴 3ヵ所出土。

貯1 平面扇形、断面フラスコ状、径75×深さ30cm

貯2 平面方形、断面フラスコ状、縦85×横65×深さ40cm。

貯3 長方形、縦90×横70cm。中に2口ある。東は深く西は浅い。東側は扇形で丸底、縦40×横68×深さ55cm。西側のP1は方形で平底、縦50×横70×深さ24cm。

土堤状遺構 貯3の西側に南北に細長く位置する。長方形、縦115cm×横19cm×厚さ7cm。貯蔵穴の西側を小さな土堤で区切る。表層には3cm厚の黄褐色土ローム塊を張り、楕円形の、その下に黄褐色土ローム混じり黒色土を20cmほど詰め地山面となる。

ベッド状遺構 北辺中央に位置する。長方形、横2.4×縦1m。段を造らない水平なベッ

ドである。長方形の範囲は踏み固めや、張り床がない軟弱な地のままの面である。その周囲は明確な張り床が張られる。層的には第4層茶褐色土土層の下部であるが、第5層ソフトロームが黒く汚れた層ともみられ、一応第4層、第5層の漸移層と考えた。人工的加工は受けていない。

階段状遺構 東辺中央に位置し焼土9を中心とする。焼土9の計測は長さ100×巾84×高さ22~34cmであるが復原された計測は長さ(東西)150×巾(南北)84×高さ14~40cmとなる。図は焼土9のみを表記。階段状遺構の平面は長方形になる模様。断面は床面と10数cm、壁と20cmの2段の段をつくる。従って壁に対しては1段の踏み段となる。層的には焼土9を主部として壁と焼土の間、焼土と床面の間はローム粒混じり暗褐色土が詰まり、焼土の周囲もこの層があった模様。床面、壁はこの部分のみ特殊に造り、立ち上りは他よりも丸くまろやかで、そのままの線で床面を7cmほど掘り窪め、遺構末端部で急に僅かな段を造って普通の床面と水平になる。

床面遺物出土状態 南西附近の床面に土玉(1)が出土した。前記の粗製小形土器(16a)、三角形土製品(15)もその出土状態やレベルからこの附近の床面遺物とした。また軽石(3)も床面出土とした。住居中央西側から軽石(2)、西辺中央に接し黒曜石(4)が出土した。南東コーナー附近には前記の倒れた完形壺(5)と正位で押し潰された完形の甕(6)が並んで出土した。その周囲に2片の木炭が出土した。北東隅の貯蔵穴中央覆土上部からは甕胴部(13)と二つに割れた完形の鉢(7)が出土した。床面からは他に甕口縁片、器台か高坏片、壺か高坏片(11)、甕胴部片(12, 14)、焼土9からは器台受部2片(9)、焼土10からは縄文土器(10)、焼土8からは壺口縁片(8)が出土した。

小結 張り床構築はまず第4層茶褐色土層を掘り下げ、第5層黄褐色ローム層上面を地とし、その上に黄褐色土ロームを混ぜた黒色土を2~4cmの厚さで一面に敷き詰め、それを床土としてその上にあらかじめ用意しておいた黄褐色土ロームを薄く張り、突き固めたり、踏み固めたりしたものである。

階段状遺構は発掘経過の所見、遺構の位置や高さ、遺構の断面や層の状態、遺構の接する床面、壁の状態等を考え合せ、さらに遺構西側のP8、P4の配置、形状、方向を考えると、ほぼ階段状遺構とみなしてよいと思われる。従ってここは本住居址の入口であり、P8、P4は入口柱穴、階段状遺構は入口の踏み段であると考えた。

(3) 遺物

概記

土器類 (単位片)

出土層位	数	詳 別		通 番
床 面	14	J-1 O-13	巾広沈線施文1 甕5, 壺2, 鉢1, 器台2, 器台か高環1, 壺か高環1, 不明1	5~14
床 近 く	9	O-9	甕4, 壺4, S1	17~19
覆 土	92	J-27	茅山期1, 関山期1, 阿玉台期2 加曾利E期2, 壺之内類5, S16	48~51
		Y-3	底部1, 縄文と横ナデ1, S1	26
		O-62	壺9, 甕23, 小形埴2, 高環7, 器台5, 器台か高環7, 環1 椀3, S5	20~25 27~47

石 器 (単位点)

床 面	1	黒曜石片	4
-----	---	------	---

石 製 品 (単位点)

床 面	1	軽 石	2
覆 土	1	軽 石	3

土 製 品 (単位点)

床 面	1	土製丸玉1	1
覆 土	2	粗製小形土器1 床上4cm位	16a
		" 1	16b
		三角形土製品1 床上8cm	15

第4号住居址出土遺物表

図版	図	通番	名称	説 明	備 考
29	20	1	土製丸玉	径3cmの球状の玉である。中央に径0.7cmの穿孔。 ヘラ磨きにより全面を細かく調整し一部に刻みベラ がある。重さ30g。	焼成良好。 褐色。

図版	図	通番	名称	観 察			備 考
29	20	2	軽 石	2 直方体状、縦1.5×巾2×厚さ0.7cm。明確な加工はない。			
		3		3 四角錐状、縦2×横2×高さ2.3cm。表面を中心として裏面側面を明確に加工する。表面には10数本の条痕が縦、斜めに走る。			
		4	黒曜石片	作業中紛失。長さ1.5cm程で多少加工がみられた。石鉄の未製品かチップと考えられる。			
図版	図	通番	名称	器 形	外 面	内 面	備 考
28	20	5	壺	口縁やや立ち微妙な段をつくる。胴部は全くの球形をなす。底部は多少あげ底。内側に強い稜をもつ。	口縁から底部まで巾2mmの縦のヘラ磨き。刻みペラが部分的に残る。底部はヘラ削り後に荒いヘラ磨きを施す。	風化するが横のヘラ磨き。	褐色。胎土焼成良好化せず。
				20	6	甕 2/3	口唇外屈し稜がつく。口縁は内湾し中ほどで多少膨らみ下部で立ち、中央に最大径をもつ胴部がつく。底部は鋭角であり、やや上げ底である。
29	20	7	鉢	外方に直線的に開く鉢で底部は小さなあげ底である。	巾5～6mmのヘラ磨き。底部はヘラ削りにヘラ磨き調整。	口縁、横のヘラ磨き。体部、ササラ状やや風化する。	褐色地に、黒色斑。胴部に巾1cmの輪積み痕。薄手。
				20	8	壺口縁1/10	厚手で開く複合口縁の上下端に押捺があり波状をなす。下端の押捺な長さ3cm、巾1.4cmの長三角形の刻みである。
		9	器台受部2片 不明 1片	器台受部は口縁と体部附近の同一個体で小形で内湾する。	ヘラ磨き。不明は横の整形痕。	同 左。	赤褐色。焼成良。不明は黒褐色。

図版	図	通番	名称	器形	外面	内面	備考
		10	土器片	巾広の沈線が斜向する縄文土器片			黒褐色。 焼成不良
		11	狭口縁片	やや外反する。	上部は横ナデ、下部は中目の刻みペラ。		褐色 胎土焼成良
	壺か高環片			へら磨き。	同 左。	赤褐色。	
	器台か高環片			へら磨き。	同 左。	暗赤褐色。	
		12	袋胴部片		太目の刻みペラの上にへら整形。	巾1.8cmの輪槽み痕。	焼成胎土良好。
		13	袋胴部片	不明	不明。	不明。	黒色、外面煤附着。
		14	袋胴部片		細くていねいな横のへら削り。	荒いへら磨き。	褐色、胎土焼成良
29	21	15	三角形土製品 上部欠損	断面三角形の柱である。底部底辺4.4×底部高さ5.7×柱高8.6cm。三角形の2角は鋭角だが、頂点は鈍角で不規則な角を構成する。底面はやや凸凹があるが平面をなす。柱は上方にゆくにつれ広がる。整形は細目の刻みペラとへら整形で全面を円滑に調整する。胎土焼成良。堅く焼き締まり重量感がある。二次焼成の有無不明。五徳の足もしくは土製支柱?			
	21	16 a	粗製小形土器 胴部～台部	瓶半形をし胴部は深くコップ形で、扁球状の中空の台部がつく。全体的に厚手で無滑である。現在高13.7×巾12×胴部現在巾16×器厚2.2cm。	胴部は縦の指頭ナデ。 胴部と台部の接合痕がみられ、コップ形の底部に中空台部を接合させた。	胴部～底部へら削り。	焼成胎土不良で小砂を含みポロボロ。暗褐色。
29	21	16 b	粗製小形土器 胴部～台部	胴部から台部へ強く屈曲し台部は中程で、胴部と接合されている。現在高10×底部巾11×胴部現在巾約10×器厚2.2cm。	上部ササラ状。下部指頭整形。	不明。 16 a, bは臼状の祭礼用土器または上下逆となり小形器台とも考えられる。	胎土焼成不良で小砂含む。 汚い赤褐色。
	20	17	袋口縁	口縁は立ちやや段がある。	横の指頭調整。	口縁、横のへら削り。胴部、中目の刻みペラ。	黒色。 外面煤附着。

図版	図	通番	名称	器形	外面	内面	備考
	20	18	壺底部?	平底。	ヘラ削り。	刻みペラ。	赤褐色。
	20	19	壺口縁1/2	口縁はかなり開き内湾するまろやかな複合口縁である。口縁上下端に押捺を施し波状となる。	口縁、縦のササラ状の上に縦のヘラ磨き。複合口縁の下は縦の中目の刻みペラ。口縁下端は4~8の刻みが入り、長さ1cm余の米粒状の器具で左から右へ引きながら施文する。	ヘラ磨き。	赤褐色。化粧する。風化激し。覆土、黒色土出土のもの、床面近くのものか接合した。
	21	20 21	小形埴	広口の口縁で内側に鋭い稜がつく。20は壺とも考えられる。	ヘラ整形。	ササラ状。	赤褐色。化粧する胎土焼成良。
	22	22 24	椀	22, 23は内湾し、24は軽くまがる。小形椀である。	風化する。	風化する。	22, 24は赤褐色。23は赤褐色で、内面に煤附着。
	21	25	坏口縁 ~胴部1/10	強く屈曲する有段口縁で内外に稜がつく。	ヘラ整形。	横ナデとヘラ整形。	赤褐色風化激し。焼成良
	21	26	襲底部	丸味を帯びた大形の平底で3つ重ねの粘土で造られている。	風化して不明。	同左。	淡褐色。砂粒多く含みボロボロである。弥生式土器。
30	21	27 28	器台受部 器台脚台 部 1/2	27は小形で浅く内湾し、径1cmの貫通孔がある。28は内湾し裾部は直口する。径1.4cmの貫通孔がある。	27, 不明。 28, ヘラ削り。	27, 不明。 28, 細目の刻みペラと巾1cmの輪積み底残る。	27, 赤褐色。風化激し 28, 厚手で整形不良赤褐色、細砂含む。

国庫	図	通番	名称	器形	外面	内面	備考
30	21	29	高坏か器台の脚台部1/2	大きく開き裾部ではわさる。29は3個、30は数個の透孔がある。30の接合部は3つ重ねの粘土で段が付けられる。	29は巾1.5~2mmの縦のヘラ磨き。30の接合部は巾3mmの縦のヘラ磨き、脚台は中目の刻みペラ。	30は上部に捻り痕、下部は整形単位0.8cmの太目の刻みペラ。	29は赤褐色で化粧する。30は赤褐色で化粧する。
		30	# 1/3				
		31	# 1/2				
30	22	32	甕 1/3	口唇外屈し稜をなす。口縁は強く屈曲してほぼ球状をなす胴部がつく。内面の口縁と胴部の接合部はふくらみ稜がつく。	口縁は横ナデ。胴部は刻みペラの上に巾1cmの斜め横のヘラ削り。	同 左。	赤褐色胎土焼成普通
		33	甕口縁1/3	33は32と同じ器形。	33は指頭とササラ状整形。	33は細目の刻みペラとヘラ整形。	赤褐色胎土焼成良
		34 35	甕口縁1/4 甕口縁1/4	34、35の口縁はゆるく曲ってグラッとした胴部がつく。	34の口縁は横ナデで胴部は中目の刻みペラとササラ状。35の口縁は横ナデで胴部は横のヘラ削り。	34の口縁は横ナデ、胴部はササラ状。35は中目の刻みペラの上に横のヘラ磨き。	
22	36 ↓ 39	甕 底部	36は鋭角な平底である。37、38は広く開く平底で、39はあげ底である。	36は風化する。37の底部はヘラ削り後、底部縁を8回の削りで8角形状に仕上げる。38の底部は巾1cmのササラ状で、棒状押圧痕がある。	不 明。 37、38、39は底部整形後、底部縁をヘラ削りで整形。	36は褐色で内外に煤附着。37、茶褐色。焼成不良。38、茶褐色。39、褐色	
22	40 41 42	壺口縁1/7 壺口縁1/5 壺口縁1/5	すべて下販みの複合口縁である。41の口縁は巾5mmの沈線がつく。	40~42口縁は横のササラ状、頸部は縦のヘラ整形。	40、横の太目の刻みペラの上をヘラ磨き。41、42はササラ状。	赤褐色。胎土焼成不良。	
22	43	壺口縁1/3	やや外反し僅かに段がつく。	縦のヘラ磨き。	横の刻みペラの上に縦のヘラ磨き。	明褐色。	

図版	図	通番	名称	器形	外面	内面	備考
	22	44 45	壺底部	44は平底。 45はあげ底。	44の底部縁はへら削り、後にへら磨き。 45の底部と底部縁はへら削り。	44, 不明 45, へら磨きで赤褐色に化粧される。	44, 赤褐色化粧される 45, 褐色。
	22	46	広口壺口縁 1/3	やや内湾する広口の口縁で下部でカーブをもっている。	横の刻みべらの上に2cm巾の縦のへら磨き。	同 左 0.6cm巾の輪痕み痕あり。	内外赤褐色で化粧され、光沢を持つ。焼成良好。
	22	47	広口壺口縁 1/3	大きく外反する直線的な口縁で口唇は外反し縁がつく。	上部は巾0.2cmの縦のへら磨き、下部に0.7cmの中日の刻みべら。	へら磨き。	赤褐色に黒褐色斑。内外化粧され煤がつく。
図版	図	通番	部位	観 察			備考
33	33	48	胴 部	縄文と沈線, 黒褐色			堀之内 I 期
33	33	49	口 縁	沈線と刺条文, 褐色			堀之内 I 期
33	33	50	胴 部	縄文と沈線と刺突文, 茶褐色			堀之内 I 期
33	33	51	胴 部	肋骨文, 黒褐色			関 山 期

第5号住居址 (第23図, 図版13-4)

1. 経過 III-16, 17Gの第3層黒色土を20cm程剝ぐと, 第4層茶褐色土を切り込む暗褐色土層の落ち込みが3×2.5mの方形の範囲にみられた。

III-17線に沿い東西畔を残し, 覆土を20~40cm程下げる。

床面や壁は第5層黄褐色ローム層まで掘り込まず, 第4層茶褐色土で構成されている。従って覆土と床面, 壁の色調は非常に類似しているため固さで判別していった。

掘り上げたプランは不整な方形をなし, 壁は浅く, 床面には不明確な柱穴が散在し, 貯蔵穴等の諸施設はみられなかった。覆土の遺物は住居址の規模に応じて少なく, 弥生式土器片と小形埴が目立った。また石英瑪瑙が覆土下部で出土した。

2. 遺構

プラン 規模 方向 不整形, 東辺2.3×西辺2.6×南辺2.8×北辺3.2m。主軸30°E。コーナーはほぼ直角をなし西辺は曲線で, 他は直線である。

床面・壁 床面は茶褐色土層のやや固い面でかなり凹凸がある不明確な面である。立ち上がりは直角で, 壁は垂直である。

西壁高40cm, 東壁高20cm, 南と北壁高30cmで山側が深く, 川側が浅く深り込まれている。

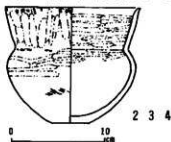
柱穴 5口出土。P1 楕円形, 尖底, 径23×深さ27cm

P2 不整形, 尖底, 径15×深さ6cm

P3 不整形, 尖底, 径20×深さ7cm

P4 不整形, 径19cm, 深さ断面不明

P5 円形, 尖底, 径15×13cm



第24図 第5号住居址床面覆土出土小形埴

炉址 貯蔵穴等の諸施設なし

床面遺物出土状態 床面からは10片の土器片が出土した。内4片の出土地点を記録した。

1は壺胴部片, 2は小形埴の逆位の底部, 3・4は小形埴の胴部片である。2・3・4と他の6片, さらに覆土出土の口縁部9片は同一個体で接合して小形埴³/₄個体となった。

3. 遺物

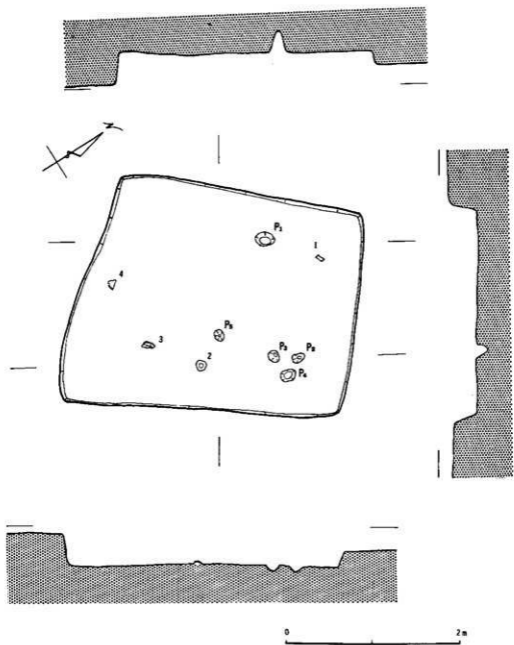
概記

土器類 (単位片)

出土層位	数	詳	明	通番
床面	10 (2)	0-10 (2)	表1, 小形埴9	1~4
覆土	50	J - 8	茅山期2, 阿瓦台期1, S5	5
		Y - 10	長岡期10	6~8
		0 - 32	表3, 小形埴9, S20	2~4

第5号住居址出土遺物表

図版	図	通番	名称	器形	外面	内面	備考
		1	壺胴部片	不明。	斜めのへら磨き	刻みペラ	赤褐色。
30	24	2	塔 2/3	口唇外屈し弱い稜がつく。 口縁内側は削られ鋭角気味となる。口縁はやや立ち内湾し、屈曲して稜がつき、強く張る胴部へ続く。 底部は小さい平底でへらで削られる。	口縁、縦の中目の刻みペラの上に縦のへら磨き。胴部、横のへら削り。	口縁、横のへら磨き。胴部、横、斜めのへら削り。	煤が外面に強く附着。地や内面は赤褐色。
		3					
		4					
図版	図	通番	部位	観 察			備考
		5	石美めのう	楕円形の自然石で加工有無は不明。 長さ4×厚さ2cm。			
33	33	6	深鉢口縁	連続竹管文	黒褐色	雲母含む	阿玉台期
33	33	7	壺 胴 部	無文と斜縄文	黒褐色		長岡期
33	33	8	壺 口 縁	無文と斜縄文	黒褐色		長岡期
33	33	9	壺 口 縁	斜縄文	赤褐色		長岡期



第23图 第5号住居址实测图

第6号住居址 (第25, 26図, 図版14~17)

1. 経過 I, II-15, 16Gの第3層黒色土層を剥ぐと第3層茶褐色土層を切り込んで辺6mの隅丸方形の黒色土の落ち込みがみられた。輪郭が不明確なため掘り下げてゆくと東辺6mの直線に長径6mの半楕円が付く不整形となった。

北辺の壁に沿い焼土が多量に出土した。これはI-16Gの野外焼土と続くようであった。また東辺は茶褐色土層が黒味がかり余り明確ではなかった。

I-15, 16線に沿い中央畔を残し、畔より西半分の覆土を60cm程下げ、床面上4~5cmのローム粒、焼土混り暗褐色土層で止める。覆土は両側から流れ込む見事なレンズ状堆積をなす。第1層は前記の黒色土層の残りが10~20cmの厚さで拡がり、第2層は暗褐色土層(20~36cm)、第3層は黒色土層(20~30cm)、第4層はローム粒、焼土混り暗褐色土層(10~30cm)である。この内第1層、2層は中央部で垂れ下がるが遺構上部を覆うように堆積し、第3層、第4層は遺構内に完全に含まれる層である。

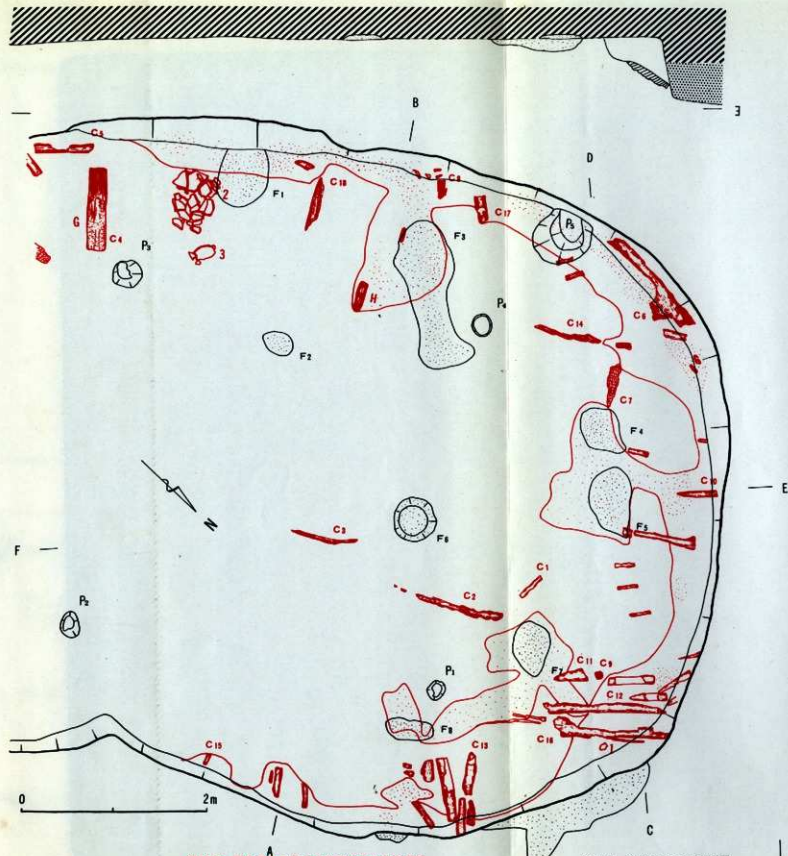
壁より巾1~0.6mの間に木炭を含む焼土が第3層黒色土とからんで厚く堆積していた。大きくみると5~6ヵ所の焼土塊があり、それを中心として周囲に焼土が拡がり流れていた。この状態から始めは壁に沿うベッド状遺構を想定したが、掘り進むにつれ、この線は消えた。西半分のプランは結局径7mの半円状になったので、東半分のプランをもう一度確かめることにした。しかし建設用地の境に接近するということもあり、明確なプランは把握せず、東半分の床面を追いながら覆土を除いていった。この結果始めのプランと違い、西半分の半円と連結する楕円状の弧線を生じ、東側の弧線は建設用地外に出ることが判明した。

東半分は西半分にみられた焼土、木炭が南辺で僅かに続くだけであり、他は全くみられなかった。また北辺端では住居址覆土より暗い覆土をもった孤状の遺構が住居址を切って出土した。

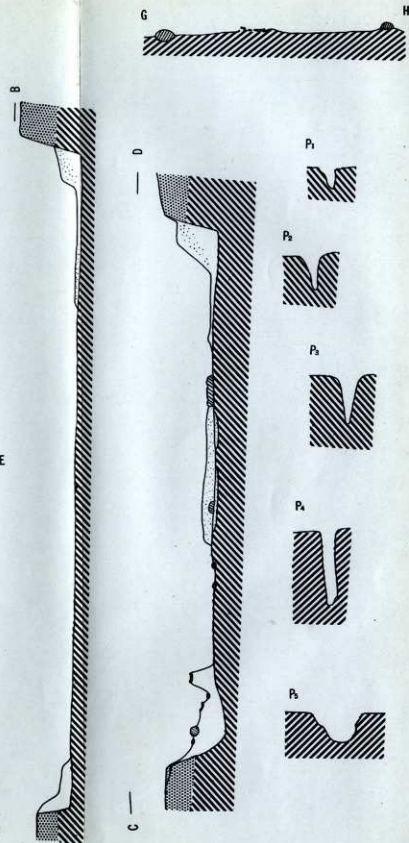
住居址覆土の遺物は覆土容積に比べ極端に少なく、土師器が少ない点と弥生式土器、縄文式土器が多い点が目立った。他に有舌尖頭器が北壁近くに流れ込んで状態で出土した。

次に床面と壁際に拡がる焼土と木炭の精査を行った。焼土の掘り方は難しく、とりあえず焼土と木炭を残し、その周囲の黒色土を除いた。この段階を第1段階とした。

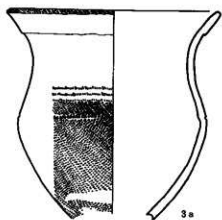
この結果、焼土は覆土第4層暗褐色土層をベースとして壁から床面へ斜めに堆積し、床面にも不整形に張り出すことが分った。木炭は小枝、かや等を含む非常に保存良好な破片で壁際を中心としてかなり下位の出土を示し、焼土と重なる時はその中に包含されたり、



第25图 第6号住居址烧土木炭出土状态实测图



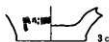
第26图 第6号住居址实测图



3a



3b



3c



第6号住居址床面出土遗物实测图



1



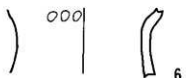
2



4



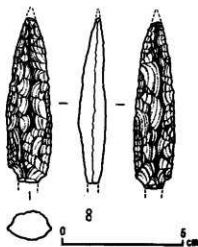
5



6



7



第6号住居址覆土出土遗物实测图

第27图 第6号住居址床面覆土出土遗物实测图

下位に出土した。次に床面を精査しながら、焼土と周囲の暗褐色土層を除き、木炭と壁の輪郭を出した。この段階を第2段階と名付ける。

この結果、床面では4本の柱穴と8カ所の炉址1カ所の貯蔵穴が出土した。壁は黄褐色ローム層を切り込み明確な立ち上りをみせたが、上部の茶褐色土層ではくずれた曲線上の不明確な線になった。床面からは弥生式土器が数個体出土した。

2. 遺構

プラン. 規模. 方向 東辺未掘。隅丸に近い長楕円形、短径7.2×現在長径7.5m。軸方向N25°W。上端の線は凹凸が激しく綺麗な線にならない。下端はやや整うが、他住居よりはゆれがある。

床面 黄褐色ローム層を強く切り込み、ハードローム層を床とする。床面は平板で非常に良好な固い面である。特別な構築はなされない。

壁 壁高36~68cm、平均60cm。壁巾10~30cm。断面はやや斜めだが立ち上りは鋭く、上部になるとかなりくずれる。壁巾は広狭が激しいが掘り方と上面のプランが不明な点が影響する。北辺東寄りの壁は特に低く30数cmで、他は平均60cm程の高さである。壁は第4層茶褐色土層から掘り込まれ、第5層黄褐色ローム層を30数cm切り込んでいる。第5層は斜面に平行して東にゆくに従い斜行し深くなる。

炉址 地床炉は計8カ所出土した。

- F1 楕円形、長径60cm、焼土小塊含まれ、焼ける。
- F2 楕円形、長径35cm、焼土小塊が含まれ、焼ける。
- F3 不整形、長径15.9×短径60cm、焼ける？。
- F4 不整形、長径60×厚さ3cm、焼土小塊含まれ、焼ける。
- F5 不整形、長径80×厚さ3cm、焼ける？。
- F6 円形、長径45×深さ6cm、床を浅く掘り、焼ける。
- F7 不整形、長径60cm、焼ける？。
- F8 長楕円形、長径50cm、焼ける？。

従って8カ所中F3、F5、F7、F8の4カ所は明確に焼けておらず、短期間の使用かもしくは不明と考えられる。他は確実に焼けている。

柱穴 4口出土。

- P1 円形尖底、径20×深さ22cm。
- P2 円形尖底、径20×深さ37cm。

P3 円形尖底、径26×深さ58cm。

P4 円形尖底、径18×深さ80cm。

貯蔵穴 P5である。円形、2段の丸底、径60×深さ32cm。壁から扇形に張り出し、覆土から木炭細片出土。

床面遺物出土状態 小形壺(1)が北西コーナー附近の木炭の側から倒立して出土した。床面上10cmの出土で、周囲の土は覆土第3層暗褐色土層である。木炭と共存するという点から本住居址に属するものと考えた。

甕(2)が南辺寄りの壁近くの床面に密着して出土した。これは底部～胴部が押し潰され大片となった状態で出土したが風化が激しく取り上げる際に細片となった。

3は前記の甕(2)の胴部片と壺の底部2片と胴部数片(3a～c)がまとまって出土したもので、この内壺胴部は床面及び覆土出土の他の土器片と巾広く接合し、遺物表の3のような完形に近い個体となった。

焼土、木炭の出土状態(第1段階) 第3層黒色土を除き焼土、木炭を出した段階で部分的に第4層暗褐色土層がでた状態である。

この全体の「掘り方」は10～60cmの中で壁に沿って斜めに堆積し、床面には鳥状の焼土が3ヵ所飛び出していた。壁ぎわには大きくみて10～30cmの厚さの焼土塊が5～6ヵ所ありその中心は鮮明ガリガリとしていた。木炭は部分的に露出してるのみで全体的に焼土や暗褐色土層に含まれたり下位にあった。

焼土、木炭の出土状態(第2段階) 木炭を残し前記の焼土、第4層暗褐色土層をはずし床面、地床炉、柱穴等を出した段階である。

地床炉F1、F3～5、F7、8の上にはいづれも前記の3ヵ所の鳥状の焼土が直接の状態であった。

木炭は第4層暗褐色土層下部から床面にかけ出土の中心があり出土状態から単一時期の所産と考えられ断面的には次の様である。

┌	床面に水平に接する。C1～4	└	
	┌ 斜めになるもの		└ 壁に平行して斜めになるもの
	┌ C5～7		└ 壁から床面へ斜めになるもの
	C8～16、その他すべて	└ 壁に接するもの21本	└ 壁に接しないもの12本

平面的には住居址中央附近にC1～3、があり他は壁近くから壁に接して出土の中心

がある。またC5～7を除き他の木炭はすべて壁に直交する方向を向いている。

木炭そのものは細目、中目のものはそれぞれまとまり、細目のものは中目、太目の木炭の間に同間隔で平行に並ぶ傾向がある。西辺はその好例である。

以上の木炭の観察から住居構築プランとは別に家屋プランとして3辺が判別できた。

北辺は(C15～13)は現在長310cm、西辺(C16～14)は長さ420cm、南辺(C17～5)は現在長490cmである。また木炭の方向から西辺と北辺、西辺と南辺は直交する。

他にC10～13は先端が尖る。

木炭の他にカヤが2カ所から出土した。C8は長さ20cm×巾10cm×厚さ15～16cmでC9は長さ7cm×巾7cm×厚さ数cmの範囲に出土した。いずれもカヤが壁に直交して詰まっていた。

3. 遺物

概記

土器類(単位 片)

出土層位	数	詳 別		通 番
床 面	8	J-1	茅山期1	1, 2, 3a-c
		Y-7	甕3(1)小形壺1 壺2～3 S2	
覆 土	32	J-15	茅山期5, 阿玉期4, 加層別E期2 堀之内期1 S3	9, 10
		Y-10	壺形胴部1 底部2 縄文施文 沈緑施文1 無文5 S1	
		O-21	甕1, 壺の變8, 小形埴1 器台4, 高坏7	

石器類(単位 点)

覆 土	1	有舌尖頭器	8
-----	---	-------	---

木炭類

カヤ類 (C8, C9)

C8, 径2～6mmの中空の柔かなもので節がある。カヤ, アシ類に属するものかと思われる。

C9, 径2～7mmでC8と同じ, C8より量は少ない。

木材類 総数52片, 推定本数43, 保存率38%

分類	巾	厚 さ	本数	原形保存数	原形断面	木 炭 番 号 (C)
細目	6 cm前後	4 cm	13	不 明	不 明	15等々
中日	10 "	5 ~ 8 cm	26	14	楕 円 形	1 ~ 3, 5, 7, 10~14
太目	20 "	12 cm	4	1	楕 円 形	4, 6, 16

- 3段階の分類は巾を基準に決めた。また長さは破損されているので記述しなかつた。
- 原形保存数は原形断面や形状が判明する木炭のみを挙げた。

第6号住居址出土遺物表

図版	図	通番	名称	器形	外面	内面	備考
31	27	1	小形壺	口縁は細口で薄手のグラツとした複合をなす。胴部は中央で鋭く屈曲し、やや反る平底へ続く。	口唇は斜縄文でその下は無文で研磨され、胴部は大粒の半節斜縄文を2段施す。底部附近はへら整形で底部に木の葉文あり。	煤、木炭附着。他は不明。	褐色。焼成良。
	27	2	甕底部 胴部1/2	高さ50cm以上の大形甕になる模様。底は丸味のある厚手の平底。	底部附近はへら削り。	不明。	淡褐色。木炭附着。小砂多く含む。胎土焼成不良。
31	27	3 a	壺 1/2	広口の口縁は外反し明確な厚手の複合口縁をなす。胴部中央でふくみを持ちながら底部へ続く。	口唇は斜縄文でその下は無文で研磨される。胴上部は単位0.9cmの波状の縄文を施す。胴部は2~3段の半節斜縄文が全面にめぐり、中央には半截竹管による凹線がめぐる。	へら磨き、胴部中央に胴上部、胴下部の接合痕あり。	茶褐色に黒褐色。内外に煤附着。砂粒を含む。焼成良好。3 bか3 cが底部の可能性。
	27	3 b	壺底部	鋭角な平底。	不規則な半節斜縄文を施し、下部は横の磨きがある。	不明。	赤褐色。
	27	3 c	壺底部	粘土のまくれがあり木葉痕がつく鈍角な平底。	同上だが下部は横のへら削り。	不明。	白褐色。
	27	4	甕口縁部 1/3	強く外反する口縁である。	口縁、横などで。胴部は中目の刻みべらの上に巾0.8cmの横のへら磨き。	口縁横などで。胴部へら磨き。	赤褐色。甕としてはきれいな凝形。
	27	5	埴口縁 1/15	やや内湾する口縁で内面に横がつかない。	口縁上端横などで。下は巾2cmの縦のへら磨き。	巾2~3mmの斜めのへら磨き。	明褐色。焼成良。

図版	図	通番	名称	器形	外面	内面	備考
	27	6	壺 ?	広口の壺 ? 口縁下に円形の凹みが列状に並ぶ。	横の整形痕。	不明。	赤褐色。 焼成不良。 厚手
	27	7	竈底部	丸味を帯びた平底。	縦のへら磨きで底部は削られる。		黒褐色。
図版	図	通番	名称	観 察			備考
31	27	8	有舌尖頭器	計測 形状 技法	実長6.9(復原長8)×最大巾1.8×最大厚1.1cm, 先端部角度40°, 断面角度22°。 中央部下方に最大巾, 最大厚があり基部を鈍角に造り出して舌をつくる柳葉形の尖頭器である。断面はレンズ状で表面は多少突出し中央に強い稜線があり, 裏面は平板で弱い稜線が走る。 押圧剥離技法である。順序は先端部から基部へ, 次に右側基部から先端部へ行われる, 但し刃部の調整剥離と表裏の前後関係は不明 表面は20数回の大きな剥離を施し, 刃部は部分的に細かな二次調整剥離を施す。裏面はやや乱雑で10数回の大きな剥離を施し, 刃部を部分的に調整する。		先端部, 舌部欠損, 石質は安山岩。風化激しく剥離不明確。使用の有無不明。
33	33	9	口 縁	無文褐色。			加曾利E期。
33	33	10	口 縁	連続半載竹管文	雲母含む	茶褐色。	阿玉台期。

第7号住居址 (第28図, 図版18, 19)

1. 経過 D地区北東コーナーにあり, 第1段丘が先ずはまる屈曲部のほぼ10°の斜面にある。従つて土層の堆積が著しく第1層~第3層及び覆土の堆積は著しい。

II-17, 18西トレンチの第3層黒色土を除くと第4層茶褐色土に黒色土層のコーナー状の落ち込みが検出された。

このコーナーを追つてI-17, 18G, I, II-19Gを拡張した。全形プランは4×5×2.5mの台形をなし, 北辺2.5mと東辺5m附近は輪郭が黒味がちで境がはっきりしなかった。但し遺構の保存度は攪乱もなく良好であった。

十字畔を残し覆土土層黒色土(10~60cm), 覆土下層暗褐色土層(20~50cm)を50~60cm掘り, 床面上4~5mで止める。上層, 下層はレンズ状堆積を示し, 黒色土からはいずれも完形に近いまたは復原可能な土器が相当量出土した。暗褐色土層もかなりの出土量であった。

次に壁を出しながら床面を剥いていった。北壁は第4層茶褐色土のみで構成され, 他の壁は第4層と第5層黄褐色ローム層で成る。第5層は南西コーナーが1番高く, 北東方向に漸次傾斜してゆく。壁の第4層は上部に黒色土が混じり, 覆土と仲々見分けがつきにくく, 第5層の立ち上りを参考にして追つたが, 始めのプランと違い, 西辺と北辺が拡張される方形のプランとなつた。なお南辺の上端は掘り過ぎで西辺の殆んどは建設用地外に出た。

床面, 西壁近くに多量の焼土が出土し, そのまわりの黒色土をはずしたところ, 段状の斜面となつた。この際焼土と壁の間の黒色土もはがした。南半には張り床, 焼土, 貯蔵穴等が出土した。張り床には所々黒色土層が入りこんでいたため, 「掘り方」は高さ10cm程の段の不規則な曲線となつた。

貯蔵穴は東端が未掘である。床面遺物は覆土に比べ破片が主で少なかった。最後に床面を立ち割り張り床の構造を調べた。

2. 遺構

プラン, 規模, 方向 隅丸方形, 辺5.1m, N50°E。正確な方形をなし, コーナーは隅丸になる。西辺未掘。

床面 複雑な床面である。南壁近くは, 黄褐色ローム層の明確な床面であるが, 捨灰近くから不明確ではあるが, 厚さ6cm程の軟弱な張り床面が始まる。張り床は北方にゆくにつれ厚くなり明瞭な固い面となり, 北壁近くでは20cm程になる。張り床の上部はつち固めた黄褐色ローム層で, 下部は黒色土が詰められ, 地は凹凸のある黄褐色ローム層である。貯蔵穴周辺と炉址周辺は張り床がなかった。

壁 壁高78~36cm, 壁は非常に高く, 南西コーナーから北東方向へゆくにつれ漸次低くなる。断面は外方にかけて傾斜し, 第4層と第5層で構成される。第5層は南西コーナーで40~50cmと厚く, 北東方向にゆくにつれ浅くなり, 北辺ではみられない。

炉址 楕円形, 長径45×短径40×厚さ9cm。中央やや北寄りにある。黄褐色ローム層を地とし, この周辺は張り床がなく張り床と同じ高さである。地は明確に焼ける。

捨灰 巾70~90cm。床上10数cmのうなぎ床状の段である。捨灰上部には焼土混りの黒色土層が一面に拉がり, 下部は黒色土となる。縦断面は壁際が1番高く裾部に向って斜面となる。また南西コーナーが33cmと急に高くなる。土器片, 炭片が少量中に含まれる。

柱穴 6口出土。

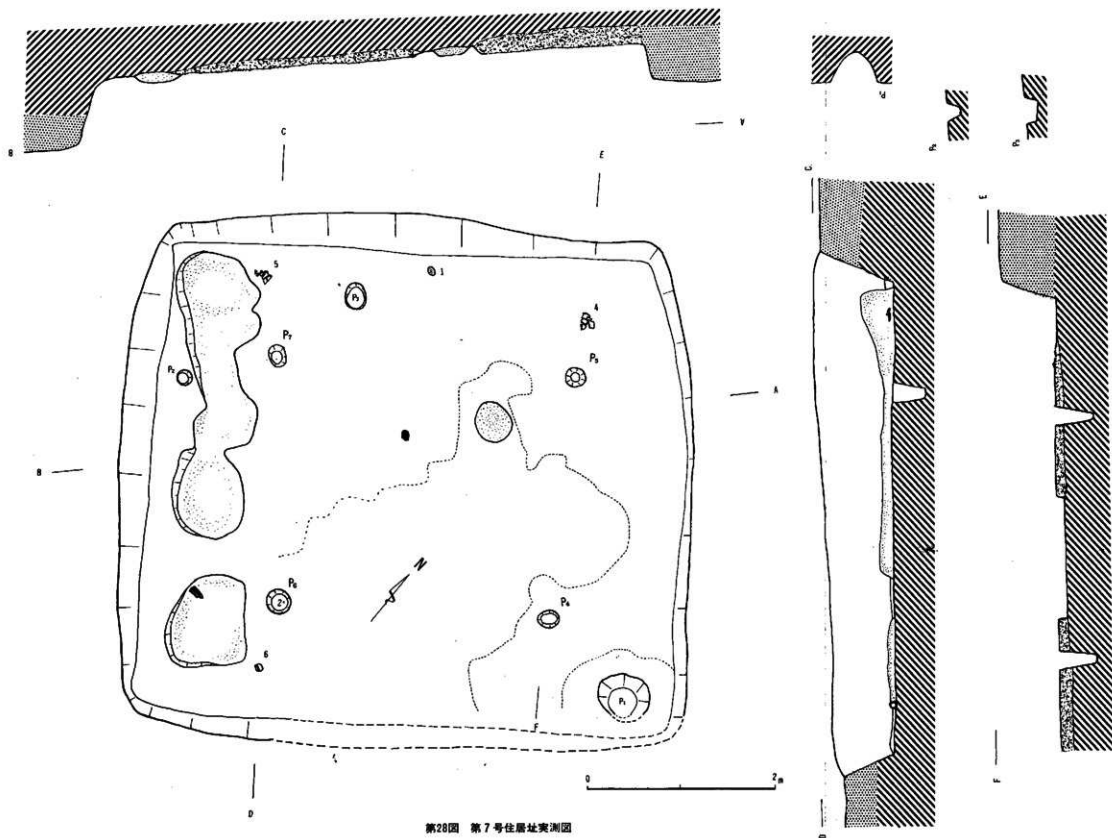
P2 円形平底	径16×深さ13cm
P3 円形平底	径29×深さ11cm
P4 円形平底	径23×深さ38cm
P5 円形平底	径20×深さ39cm
P6 円形平底	径25×深さ不明
P7 楕円形平底	径21×深さ33cm

貯蔵穴 P1である, 円形丸底, 径55×深さ33cm。北東コーナーにある。東端未掘。底部の稜が壁際に近く全体として壁から扇形に張り出す。

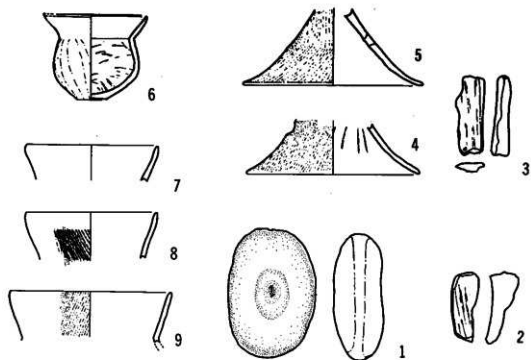
床面遺物出土状態 遺物は破片が主体で土師器, 弥生式土器, 縄文式土器が出土した。南東柱穴近くでは小形壺(6)がやや斜位に, 西壁中央にすり石(1), 南東柱穴内に砥石(2), 他に高環片(4,5)や炭片が少量出土。砥石3は東辺近くの床面より出土。

小結 段状の捨灰はC-Dの透し断面でみると, 南西コーナーが33cmと1番高くなっている。またこのコーナーの壁が78cmと住居址中で1番高い。さらに南西コーナーの捨灰を囲んでP2, P3がある点より南西隅を入口と考え階段状遺構, P2, P3を入口柱穴と推定した。

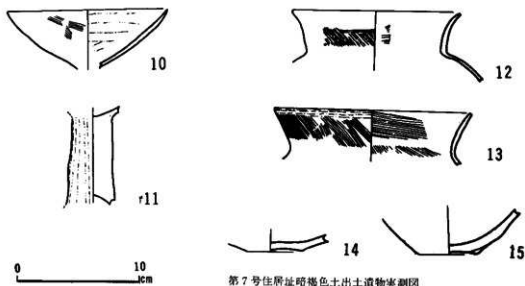
張り床構築に関してはまず地の黄褐色ローム層が北東方向に向い傾斜し, 北半はロームを切り込まなかった点, 南壁と北壁附近の床面の比高が14cm, 地山の比高が34cmであることより, 北半分に最高20cmの張り床を構築することにより, 床面の水平を保ち, 併せて黄褐色ローム層を床面とする。住居構築の規定性を解決したものと思われる。



第28图 第7号住居址平面图

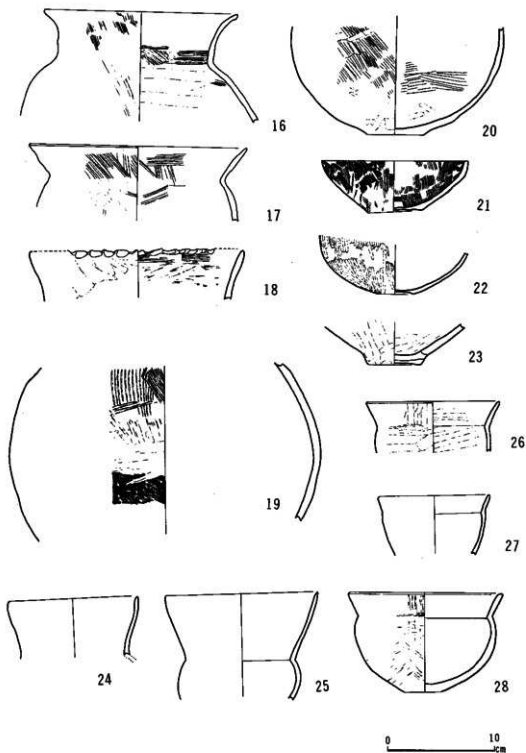


第7号住居址床面出土遗物实测图

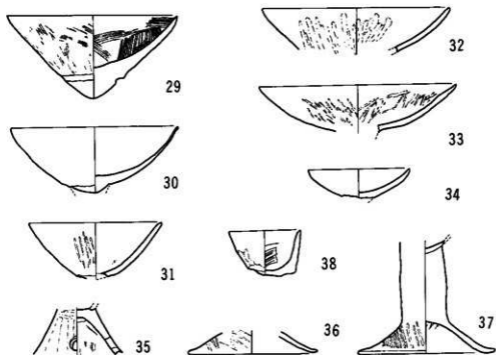


第7号住居址暗褐色土出土遗物实测图

第29图 住居址床面覆土出土遗物实测图



第30图 第7号住居址覆土出土遗物实测图



第31图 第7号住居址覆土出土土器実測图

0 10 cm

4. 遺物

概記

土器類 (單位片)

層位	數	詳	別	通番
床面	16	J-2	茅山期2	40, 45
		Y-1		
		O-14	甕4, 小形埴3, 小形壺1, 高坏2~4 器台1, S3	
暗褐色	29	J-8	茅山期3, 加曾利E期2 阿玉台期1, S2	
黑色土	105	Y-4		10~15
		O-17	壺15, 高坏2	
		J-16	茅山期5, 阿玉台期3 加曾利E期1, S6	39, 41, 42
		Y-14	台付甕口縁1 縄文施文13 (長岡)	43, 44
		O-75	甕28, 壺1, 小形埴3, 器台1, 高坏8 坪3, 手捏鉢1 S30	16~38

石器 (單位点)

床面	1	磨り石	1
	2	砥石1, 砥石1	2, 3

第7号住居址遺物出土表

図版	図	通番	名称	観 察			備 考
31	29	1	磨り石	石輪形、長径10.8×短径7.4×厚さ4cm。上下端表面中央に敲打あり。全体に磨滅する。花崗閃緑岩。			
31	29	2	砥石	縦6×横2×厚さ2.3cm、凝灰岩、平面は長方形。縦断面はゆるやかな弓状で弓の弧の内側が研磨された使用面となり数条の擦痕が走る。			
31	29	3	砥石	縦6.5×横2×厚さ1.4cm、緑泥片岩。平面は長方形、横断面は扇形で、研磨された使用面が表面にかぶさるようにあり、数条の擦痕が走る。			
図版	図	通番	名称	器 形	外 面	内 面	備 考
	29	4	高環か器台の脚台部1/2	大きく開き透孔を数個もつ。	巾2%の縦のヘラ磨き。	上に埴り痕。	赤褐色、化粧する。内外煤附着する。
	29	5	高環脚台部	裾部は僅かに屈曲し、稜がつく。透孔数個あり。	2段にわかれ、巾2mmのヘラ磨き。	上に埴り痕。下は横のヘラ削り。	赤褐色。化粧する。
31	29	6	小形壺	広口の口縁は僅かに内湾しグラッと曲って球状の胴部がつき、小さなあげ底となる。口縁上端に一条の凹線がめぐり、内面に稜がつく。	口縁、横ナデ。胴部、縦のヘラ削り。底部、不明。	口縁、横ナデ。胴部、横斜めのヘラ削り。	褐色。全体として荒い整形。
	29	7 9	小形増口縁	7,8は内湾する。9は直口する大形口縁である。	7, 不明。 8, 口縁は横ナデ。下は斜めの刻みべらの上に巾2mmの縦のヘラ磨き。9, 巾1mmの縦のヘラ磨き。	8, 横ナデ。 9, 同 左。	7, 赤褐色。化粧する。 8, 褐色。 9, 黒色。
	29	10	高環胴部1/10	直線的な薄手の坯。	口縁、横ナデで胴部、中目の刻みべらとヘラ整形。	巾1mmの横のヘラ削り。	赤褐色。化粧する。胎土焼成良。
	29	11	高環脚台部	円筒形である。	巾7~8mmの縦のヘラ磨き。	刻みべら。	赤褐色。化粧される。胎土焼成良。

図版	図	通番	名称	器形	外面	内面	備考
	29	12 13	襲口縁1/2 # 1/6	12, 口縁は中程で立ち強く屈曲して胴部へゆく。 13, 口縁は外反しなだらかに胴部へゆく。	12, 口縁上部は横ナデ, 下部は単位巾0.7cmの太目の刻みベラ。胴部はへら削り。 13, 口縁上部は浅い沈線が数条, 下は縦の中目の刻みベラ。	12, 極細の刻みベラ。 13, 横の太目の刻みベラ。	赤褐色。 煤附着。
	29	14	襲底部	大きく開くあげ底。	円(径1.3cm)を中心とした右渦巻があり, その上に少しへら削り。	へら磨き。	赤褐色。 煤附着。
	29	15	襲底部	あげ底。	円(径1.5cm)を中心とした左渦巻があり, その上にへら削り。		褐色。
	30	16	襲口縁1/4	口縁中程で立ちややまがって張りのない胴部へ続く。	口縁, ササラ状。胴部, へら削り。	口縁下端, 中目の刻みベラ。 胴部, 中目の刻みベラの上にへら削り。	褐色。 外面煤附着。
	30	17	襲口縁1/4	口唇は外屈し, 稜がつく。口縁は「く」の字形にまがりやや張る胴部へ続く。	口縁上部, 横ナデ。 口縁下部, 太目の刻みベラ。 胴部, ササラ状。	口縁, 横斜めの刻みベラ。 胴部, 不明。	赤褐色。 外面煤附着。
	30	18	襲口縁1/10	直口し押圧による波状を呈す。	へら整形。	横の刻みベラ。	赤褐色。 台付變?
	30	19	襲胴部1/3	余り張らない大きな胴部である。	上段, 縦の太目の刻みベラ。中段, 極細の刻みベラにササラ状。下段, 細目の刻みベラ。	へら磨き。	明褐色。 外面上部に煤附着。
32	30	20	襲底部1/5	ゆったりとした深い胴部に平底がつく。	斜めの太目の刻みベラにへら削り。	同 左。	内外に煤附着。 赤褐色。
32	30	21	襲底部	20と同じだがあげ底で, 破損後	中目の刻みベラ。底部縁はへら整形。	同 左。	赤褐色。

図版	図	通番	名称	器形	外面	内面	備考
				に縁を口唇のように加工し、坏に2次利用。			
	30	22	壺底部	薄手のあげ底。	巾1.5cmの縦のへら磨き。	へら整形。	赤褐色。
	30	23	甕底部	底部は鋭角ではば垂直にしまるあげ底である。	荒いへら削り。底部はへら切り。	同左。	褐色。内外に煤附着。
	30	24	小形増1/10	内湾する口縁に胴部がつく。内側に稜がつく。	極細の刻みべら。	斜めの刻みべら。	赤褐色。化粧する。
	30	25	小形増1/4	24と同じ。	横のへら磨き。	同左。	赤褐色。化粧する。外面に煤つく。
32	30	26 27 28	坏 1/5 坏 1/8 坏 1/2	僅かに外反する広口の口縁に半球状の胴部がつく。 26は外屈し稜がつく。 28は口唇内外に稜がつき、底部は小さな平底である。	26. 巾0.5~1cmのへら削り。 27. 整形不明。 28. 口縁はササラ状。 胴部、横の刻みべらの上に縦のへら削り。	26, 27 不明。 28. 口縁はササラ状。 胴部は不明。	26は赤褐色。外面煤附着。 27は黒色。 28は赤褐色。焼成不良。外面上部に巾3cmの煤めぐる。
32	31	29 30 31	高坏坏部 高坏坏部 高坏坏部1/8	まろやかに内湾する深い坏部で、底部に大きな円錐状の突出部がある。	29. 口縁は横ナデ。体部~底部は中目の刻みべらをへらで削る。 30. 口縁は横ナデ。下は口縁のへら削り。 31. 底部に稜がつく。	29. 口縁は横ナデ。体部~底部は斜め縦の中目の刻みべら。 30. 口縁は横ナデ。胴部は不明。 31. へら磨き。	赤褐色でいづれも化粧をする。 29の内外に煤附着。
	31	32 33	高坏坏部1/5 高坏坏部1/4	やや内湾する広口の浅い坏部である。	口縁、横ナデ。胴部、へら磨き。	同左。	32, 33, 赤褐色で化粧する。 33, 外面に煤あり。
	31	34	小形器台受部	やや内湾する浅い受部である。	へら磨き。	同左。	赤褐色。化粧する。

図版	図	通番	名称	器形	外面	内面	備考
	31	35	高环脚台部 2/3	直線的に張る台形をなし、径1cmの透孔が数個ある。	巾0.6cmの縦、横のへら削り。	不明。	赤褐色で化粧する。外面に煤附着。
	31	36 37	高环裾部 高环脚台部	円筒形の脚台部に未広りの裾部がつく。	36、へら磨きで裾部は横ナデ。 37、縦の刻みべらの上にへら磨き。裾部は横ナデ。	36、横ナデ。 37、右廻転のへら削り、裾部は横ナデ。	36、37、赤褐色で化粧する。
32	31	38	小形手捏土器 (坏部)	ゆがんだコップ形を呈す。	指頭で全面を整形し一部に0.5cm巾の刻みべらとへら削り。	同左。	黒褐色。 焼成不良。
図版	図	通番	部位	観 察			備考
33		39	胴 部	貝殻条痕文	織縷含む		茅山下管塚
33		40	口 縁	?			茅山下管塚
33	33	41	胴 部	連続半截竹管文	雲母含む	褐色	阿上六塚
33	33	42	胴 部	荒い縄文		茶褐色	加曾根三塚
33	33	43	胴 部	斜縄文		黒褐色	長岡塚
33	33	44	胴 部	S字状結節文と斜縄文		褐色	長岡塚
33	33	45	底 部	無文と斜縄文		赤褐色	長岡塚

高床式建築址 (第32図)

D地区南方のII, IIIの11, 12Gの第4層茶褐色土層上面に5口の柱穴が出土。もう1口出土する柱穴は未掘であり、完掘の5口断面も実測できなかった。

柱穴の配置は1間2面であり、北列は2口、南列は3口である。柱穴の形状はいずれも円形で断面は浅い丸底をなす。

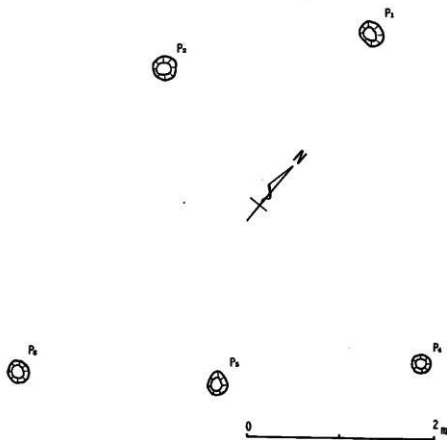
計測

北列 P1 径26×深さ15cm

P2 径25×深さ28cm

P3 未掘

南列 P4 径20×深さ17cm



第32図 D地区高床式建築址実測図

P5 径25×深さ20cm

P6 径23×深さ20cm

P1-P4間3.5m P2-P5間3.4m

P1-P2間2.25m P4-P5間2.2m

P5-P6間2.1m 主軸N40°E。

計測上の誤差はあるが、全体としてかなりいびつで、5~10cm内外の各柱穴間の動きがあり、特にP5は南列より少し飛び出る。

遺物は土器細片少量出土。時期不明だが、柱穴の形状、全体のプラン各柱穴間の間隔等を考察して、本地区の主体である五領期の可能性が大である。

野外焼土址 (第14図)

3基出土し、一部発掘。

II-17, 18G北端に1基出土。層は第3層上部から第4層上面に亘り、東から西へ傾斜する。範囲は東西3×南北1×厚さ0.2mで、東側の1×1×厚さ0.1mのみを発掘した。焼土は割合鮮かで、中から小形埴(第10図-3)環(第10図-9)の完形が各々まとまって割れた状態で出土した。焼土は地床炉か捨灰か不明。

I-16Gの東北端に1基出土。未掘、第6号住居址の屋外にあたる。層はII-17, 18G北端焼土と同じ、範囲40×30cmで厚さ不明。焼土は黒味がかり動いている模様で捨灰と考えられる。

IV-17西トレンチで1基出土。本トレンチの南半分第4層上面に黒色の有機物の薄い拉がりが検出された。これは南方にゆくにつれ次第に深くなるが、掘り込みではなかった。焼土はこの黒色土の中程に円形(径24cm)のものが出土した。焼土は地が焼けていた。黒色土、焼土は未掘である。

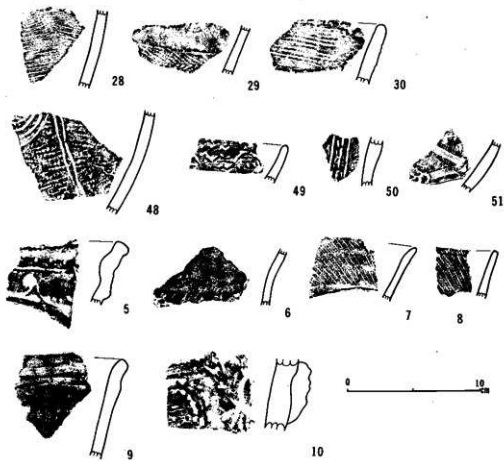
なおこのトレンチの第3層からは弥生時代久カ原期の台付甕(第10図1)の半個体が割れて出土している。

小結 II-17, 18Gの焼土は五領期、I-16, 17Gの2基は不明である。II-17, 18G出土の小形埴、杯は二次焼成を受けており、焼土との関連からその機能が推察される。

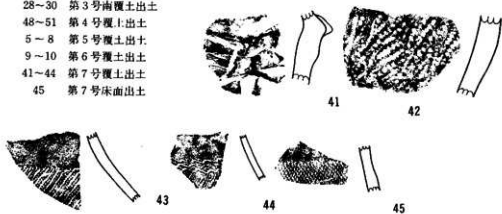
柱穴 (第14図)

III-15, 16東トレンチで3口出土、未掘。

(安達 新)



- 28~30 第3号南覆土出土
 48~51 第4号覆土出土
 5~8 第5号覆土出土
 9~10 第6号覆土出土
 41~44 第7号覆土出土
 45 第7号床面出土



第33图 D地区各住居址出土土器拓影图

D地区凡例

a. 各遺構ごとに本文、図版、図に共通な遺物番号を用いた。たとえば本文中のD地区第4号住居址の遺物番号3は後述の第4号住居址遺物概記、出土遺物表の通番3にあたる。表には図版、図の通番が記されている。

b. 図凡例

P……柱穴

C……木炭

F……焼土

算用数字……遺物番号



c. 遺物概記の見方

○ 土器の記述は層ごとに土器片の数量を示した。なお接合された土器、完形の土器はそれぞれ1片として数えた。

○ 土器類の詳細の項では略号をJ……縄文時代、Y……弥生時代、

O……古墳時代、S……細片あるいは時期不明土器片とした。またその内訳は型式名器形、部位、文様名等を適宜併等を適宜併用して示した。

○ 土器以外の遺物記述も土器に準じるが内訳では名称や層位等を記入した。

d. 遺物表の見方

○ 土器以外の遺物と表末に記した拓影記述は観察事項を記し、土器の記述は下記の基準に従った。

○ 名称の項は土器の器形と残っている部位及びその割合を示す。

○ 部位名称は一般の基準に従ったが「底部附近」は底部近くの胴部表面を云う。

○ 整形痕の分類は横ナデ、ヘラ削り、ヘラ磨き、刻みベラ、ササラ状、指頭と6種の分類をした。刻みベラ整形はヘラの先端に刻みを入れ押し引いたもので刻みの巾により太目、中目、細目に分けた。ササラ状整形はヘラの先端を

ササラ状にして押し引いたものをさす。横ナデは獣皮もしくは布等の繊維質のもので器面を横にナデたものをさす。へら削りはへらで器面を荒く削ったものでへら磨きはへらで器面を円滑に磨き上げたものをさす。実測図では横ナデを除き他の整形痕を殆んど表現した。

- 備考の記述で特に断わりのない場合は土器表面についての記述である。
- e. 拓影表の見方
- 土器の器形が不明なものは部位で示した。
- 土器の所属時期は型式名で示した。所属時期の不明なものは大略を記した。

第6章 E地区 (34図)

1. 層序及び出土遺物 (第36図, 図版21-1)

層序と層厚 (単位 cm)

層名	場所	古墳部	周溝部	斜面中央部	斜面下部
表土		30	60	25	50
茶褐色土		40	×	20	30
暗茶褐色土		25	黒色土 45	黄褐色ローム層	
黒褐色土		20-30	暗褐色土 25		
黄褐色ローム層					

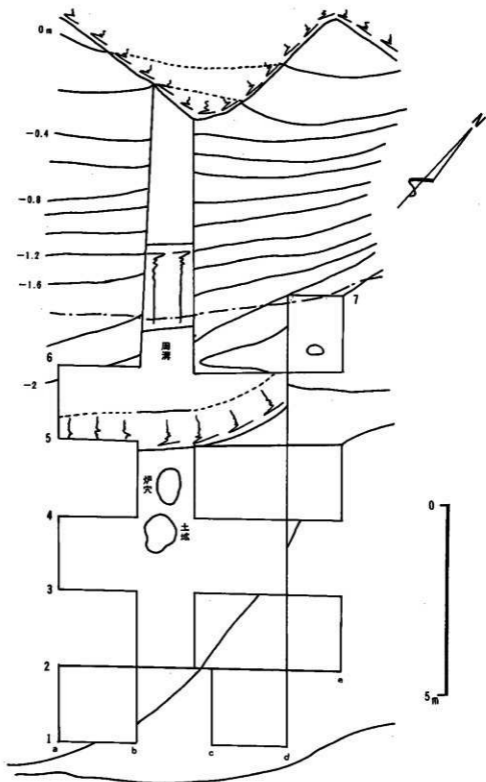
層序と出土遺物 (単位 片)

層名	時代	総数	縄文				弥生	古墳	不明
			茅山	阿玉台	堀之内	不明			
表土		15	3	2		3	2	3+埴輪片1	1
茶褐色土		41	4	10	2	6	3	1	15
(古墳盛土 周溝覆土)		19	1	2		2		3+埴輪片1	10

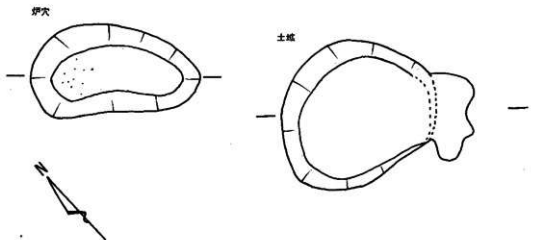
E地区 出土遺物表

土器類

図版	図	通番	出土区層位	部位	文様(整形)	胎土, 焼色等	時期
34	37	1	c-5 第2層	胴部	連続点列文	繊維含む褐色	子母口
34	37	2	d-2 第1層	"	貝殻条紋文	" 灰褐色, 黒褐色	茅山下層
34	37	3	a-1 第2層	"	"	" "	"
34	37	4	b-2 第1層	"	"	" "	"
34	37	5	a-1 第2層	口縁	連続半截竹管文	雲母含む茶褐色	阿玉台
34	37	6	a-3 第2層	胴部	"	" "	"
34	37	7	b-2 第1層	口縁附近	"	" "	"
34	37	8	b-7,8 黒色土層	"	"	" "	"
34	37	9	d-2 第2層	胴部	"	" "	"
34	37	10	b-7,8 黒色土層	底部	縄文	細砂含む赤褐色	?
34	37	11	b-2 第2層	胴部	縄文に沈線	薄手, 黒褐色	堀之内I
34	37	12	b-2 第2層	"	"	" "	"
34	37	13	b-3 第2層	複合口縁	縄文と押捺縄文	細砂含む茶褐色	長岡
34	37	14	a-1 第2層	口縁	格子状叩き目	焼成良, 黒色	中世鎌倉?
34	37	15	d-6 第2層	"	?	" 赤褐色	?
図版	図	通番	出土区層位	名称	観察		備考
34	38	16	d-2 第1層	円筒埴輪片	胴部片で断面台形の巾1cmの突帯がめぐる。表面に斜めの櫛目整形。赤褐色で風化激し, 器厚1.5cm。		
34	38	17	b-78, 黒色土	円筒埴輪片	整形痕なし, 赤褐色。		



第34図 E地区グリット遺構全景図



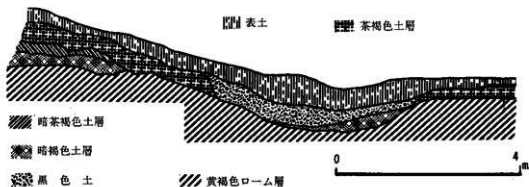
1. 暗褐色土层 (烧土混入)

暗褐色土层

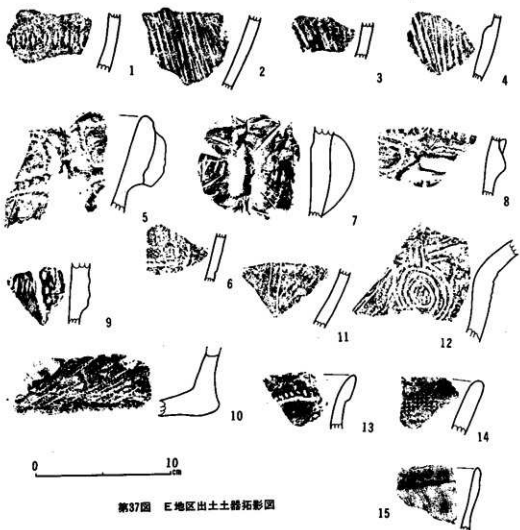
黄褐色ローム層



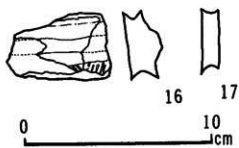
第35图 E地区炉穴·土城实测图



第36图 E地区古墳墳丘断面实测图 (北壁)



第37图 E地区出土土器拓影图



第38图 E地区出土土器轴测图

当地区の元来の斜面部は5°の緩斜面で古墳裾部から15°の急斜面になってゆく。層序は古墳附近で4～5層、斜面部で3層に分かれる。表土層は林地に生成される乾いた暗黒色の土壌である。これは周溝部で厚く、多分古墳造営以後の周辺部からの流れ込みと考えられ、古墳部、斜面中央部の薄さはこれに関連するものであろう。また斜面下部の厚い堆積は本来の堆積と考えられる。

第2層茶褐色土層は赤味を帯びた褐色をなし、バサバサした粒径の大きい壤土であり、必ず黄褐色ローム粒を混入する。古墳部と斜面下部で厚く、斜面中央部で薄く、周溝部では存在しない。斜面中央部から下部にかけての堆積が本来のものと考えられ、周溝部、古墳部は古墳造営によるものであろう。

地山は黄褐色ローム層であり、古墳、周溝附近で第4.5層、斜面部で第3層にあたる。周溝、古墳附近では人為的変形を受け、斜面部では本来の堆積を示す。この層は洪積世火山灰土か土壌風化された壤土であるがソフトロームとハードロームに分けられる。

ソフトロームは全面に亘らず部分的にある。これは上部に堆積する土壌溶液のしみ込みや木根の侵入によりハードロームが暗っぽくなり柔かく赤褐色気味に変色し、ハードロームより浮き上がって分離したものである。ハードロームは堅く緻密な明褐色の土壌を指す。

層と遺物の関係は表の通りであるが、第2層の弥生時代～古墳時代の土器片は出土グリットが大きな木根により攪乱されていたので問題となる出土層位である。表土層及び古墳盛土、周溝覆土では縄文土器とそれ以降の土器が半々である。第2層では縄文土器片は22片でそれ以後の土器の4部強となりこの層の主体を占める。縄文式土器は阿玉台式が一番多く、茅山式、堀之内式と続く、弥生式土器は長岡式である。土師器は刻みペラのものとヘラみがきの小片が出土した。

小結 各層の時期は遺構の切り込み方と関連し斜面部の第1層は弥生時代～古墳時代、第2層は縄文時代を主体とし、古墳周溝部の第1層から地山までは古墳時代の頃と考えられる。

2. 遺 構

(1) 古墳 (第34, 36図, 図版21)

現状 西方向から3段階に分けて凸形に入り込んだ土取り工事により主体部が消失し東側に裾部が残る。全体の8分の1が残存していた。墳丘の形状は不明だが、その状況からすると円墳と考えられる。

立地 第2段丘の先端部中央に位置し、この丘陵状の鞍部に占地する。

規模 裾部からの復原径約25m。周溝からの復原径約30m。復原高2～3m。

封土 残存部最大厚1, 2m。層序、層厚については前記。この層はそのまま積まれた柔かで単純な層をなし、版築状のものはみられない。また第2層茶褐色土層、第3層暗茶褐色土層には顕著なローム粒、ローム塊が混入する。

地山 黄褐色ローム層である。古墳造営時には全面整形され、古墳裾部より2mの所から円錐状に整形された形である。

周溝 上巾約4～4.8m。底巾2m。深さ約0.8m。形は片肩状で、周溝外側のみが段を造り古墳と周溝の間に平坦面を造らない。掘り込みは第2層上面から始まり、地山の黄褐色ローム層を60cmほど掘り下げる。

遺物 周溝覆土の黒色土層より、埴輪片1片、縄文時代、古墳時代の土器片が出土。土師器は型式不明。

小結 古墳の造営は第2層堆積後に行われた。またその造営は古墳封土の層が逆転している事から、周溝掘削の際の土を整形した地山に順次積んでいったものと考えられる。

〔2〕 炉穴と土壇 (第35図、図版22)

位置 炉穴はb-5G中央、土壇はb-3G北側にあり、その間は40cm離れ、ともにN42°Wの方向を向く。なおこの間と炉穴の周辺は焼土が散在する。

層 第3層黄褐色ローム層の緩斜面を掘り込み、部分的にソフトロームがみられる。覆土は暗褐色土層であり、炉穴は焼土が上部から含まれ、底面は焼ける。

形状 炉穴は楕円形、土壇は円形。断面は斜面上方が深く。下方が浅くなる片立ち上がりである。壁・底面は良好であるが、土壇底面は根攪乱により凹凸が激しく不良である。

規模 炉穴、長径90×短径50×深さ16cm。土壇、径80×深さ20cm。

出土遺物 なし

小結 出土遺物がなく時期不明であるが層位から縄文時代、第2層の遺物により早期～後期、形状より茅山期の可能性が考えられる。またこの遺構は住居址内部のような遺構の内側に位置するものではなく、野外のキャンプファイヤーの類に属するものであろう。

(安達 新)

結 言

広汎な広がりを持つ、おおびた遺蹟の、一部約2000㎡を調査した結果、弥生時代後期の住居址と、古墳時代初頭にあたる五領期、和泉期の住居址を検出した。

八千代市内に於ける弥生時代の住居址の遺蹟調査は三例あるが、いずれも弥生時代後期の久ヶ原式のものであって、長岡式及び前野町式住居址の発見は始めてのものであり、この調査の収穫の一つである。発見された弥生時代の住居址のうち、後期前半の長岡式土器を伴う住居址が低位の段丘に、後期後半の前野町期住居址がこれより一段上の台地上にあり、従來說かれている弥生時代後期の北関東系、南関東系それぞれの住居の占地性を示していた。おおびた遺蹟の占地性は立地から見ると、次のことを想定させる。

下総地方に弥生中期の農耕文化が入ったとはいえ、弥生後期の遺蹟数の乏しさから推した八千代地区は灌漑技術、人員のいずれも乏しく、海退後間もない前面の印旛沼の湿地を可耕地に拡大したのは、農具を作る鉄器しか持たぬと考えられる弥生時代ではなく、むしろ農具としての鉄器の普及する次代にあったと思われる。おおびた遺蹟の弥生人にとっては縄文晩期の採集経済から脱却しきれず、半農の状態が継続していたものと思われる。採集及び漁獲の面からおおびた遺蹟を見ると、台地や谷に自生する植物質の採集と、沼を対象とした漁撈が先づ考えられる。巨視的に見れば補食採集地への依存度の強弱が、沼に密着した低位段丘の住居を作らせ、また台地上に住居を持たせたものと考えている。

古墳時代住居址は五領、和泉の2期にわたり、いずれも祭祀遺物を遺すところから、継続した生活が営まれたものと思惟させるが、これを前述の弥生時代後期前野町式住人の発展継続したもの捉えるには資料が不足であり、後日の考究を俟たねばならない。

和泉期の住居址から分析の結果玄武岩質と認められた岩滓が出土した。これの産出地は幾内以西は島根県、幾内以東では富士山及び伊豆七島に限定されるものであるところから、ここでは祭祀法の東漸と関連して富士山産出のものとするのが最も妥当であろう。このことは幾内勢力の下総への波及が東海経由でなされた道程を示す例証の一つであると考えている。

おおびた遺蹟の所在する印旛沼最奥部は、従来住居址の発掘調査は非常に乏しく、この古代は印旛沼周辺の遺蹟のあり方から類推するだけに止まっていたが、今回の調査を契期として、印旛沼最奥部独自の古代観を持つこととなろう。

この調査に際して、市内外の多くの方々から御指導と御援助を頂いたことを深く感謝するものです。

(増 田 誠 蔵)

調査団名簿

第1次調査団（確認調査）

団長	増田 誠 蔵			
調査主任	村田 一 男			
調査員	熊野 正 也	堀部 昭 夫		
	佐藤 武 雄	中山 吉 秀		
調査補助員	矢吹 俊 男	梅崎 恵 司		
調査協力員	八千代高校史学会			
	中山 守	吉川 淳 一	石山 伸 之	
	大久保 澄 江	中台 みどり	金子 洋 子	
	相川 和 枝	門倉 孝 男	塩 沢 真 弓	
	小幡 喜代子			
	その他			
作業補助員	秋山 豊 吉	飯島 馨	石井 丈	
	石井 任	伊藤 光	今井 徳 治	
	大綱 三 郎	大綱 七 郎	落合 錦 一	
	金子 昭	小林 忠 則	鈴木 寿 郎	
	清宮 和 一	清宮 盛 蔵	清宮 利 治	
	中島 尚	福田 朝 夫	藤 繩 昇	
	渡辺 洋 司			
事務局	八千代市教育委員会社会教育課			
	課長 山 本 勲			
	佐々木 優 一	木原 善 和		

第2次調査団（本調査）

団長	増田 誠 蔵			
調査主任	村田 一 男			
調査員	堀部 昭 夫	堀部 美代子	安達 新	
調査補助員	武田 稔	（千葉工大考古学愛好会）		
調査協力員	八千代高校史学会			

中山 守	吉川 淳一	石山 伸之
大久保 澄江	中台 みどり	金子 洋子
相川 和枝	門倉 孝男	塩沢 真弓
小幡 喜代子		

その他

千葉工業大学考古学愛好会

伊藤 正明	佐藤 忠秀	田村 清和
高木 義久	西山 能布広	
東海大学	山岸 憲	

作業補助員

飯島 とし	相澤 琴	飯島 馨
金子 昭	天川 昭夫	伊藤 光
大綱 はな	岩井 とみ子	金子 己之助
伊藤 喜八	伊藤 孝子	田坂 浩
市原 慶三		

事務局

八千代市教育委員会社会教育課

課長 山本 煎
佐々木 優一 木原 善和

第2次調査整理参加者

遺物整理

八千代市郷土歴史研究会

佐久間 康雄 山下 直子 多田 郷子

松林 美樹子 武田 稔 安達 新

遺物実測

武田 稔 安達 新

製図

堀部 美代子 安達 新

図面整理

図版作成

写真撮影

} 安達 新

凶
版



1. 遺跡遠景（真上より矢印調査地）



2. 遺跡遠景（東方より）



3. 遺跡近景（南方より）



1. 発掘地区全景



2. A・D地区住居址 全景



1. C地区第6.7トレンチの第1号住居址



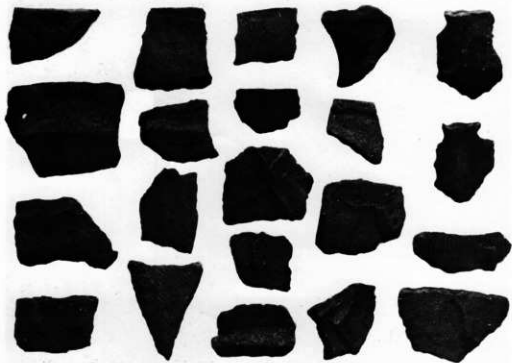
2. C地区第9トレンチのオ2号住居址



3. B地区の発掘状況



C地区第12トレンチ第3号住居址覆土中出土の古式土師器



C地区各トレンチ出土の縄文式土器

C地区出土遺物



1. D地区発掘前全景



2. D地区グリット全景



1. 第1.2号住居址全景



2. 第1号住居址貯藏穴



1. 第3号北、南住居址全景



2. 第3号北、南住居址落込確認狀態



3. 第3号北、南住居址東壁断面



1. 第3号南住居址貯藏穴附近



2. 同 貯藏穴



3. 同 鉄滓(2)出土狀態



4. 同 小形壺(8)出土狀態



5. 同 刺形石製品(27)出土狀態

1. 第3号南住居址 西側附近遺物出土狀態



2. 同 甕 (4) 出土狀態



3. 同 甕 (5) 出土狀態



4. 同 高環 (7) 出土狀態



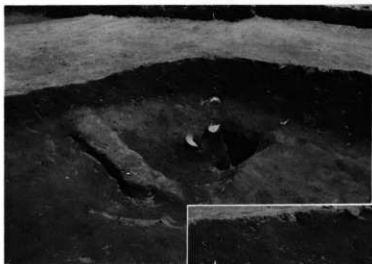
1. 第4号住居址全景



2. 第3号北、南、4号住居址全景



1. 第4号住居址東壁附近



2. 同 北東隅貯藏穴



3. 同 階段状遺構(焼土)



1. 第4号住居址南東隅附近



2. 同壺(5)出土狀態



3. 同甕(6)出土狀態



4. 同粗製小形土器(16a)出土狀態



5. 同三角形土製品(15)出土狀態



1. 第4号住居址西壁附近



2. 同 南側貯藏穴



3. 同 北側貯藏穴



4. 第5号住居址全景



1. 第6号住居址全景(第1段階)



2. 同 西壁(第1段階)

3. 同 南壁(第1段階)





1. 第6号住居址全景(第2段階)



2. 第6号住居址西壁附近(第2段階)



1. 第4号住居址貯藏穴



2. 同 木炭 (C10附近) 出土狀態



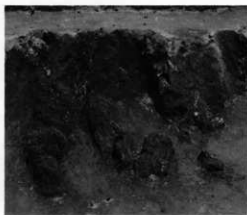
3. 同 北西隅木炭 (C9. 11. 12. 13. 16) 出土狀態



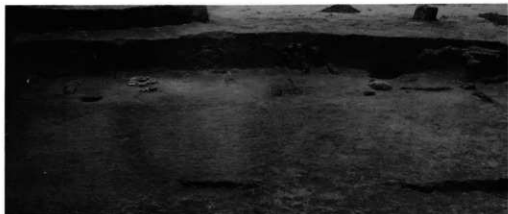
4. 同 小形壺 (1) 出土狀態



5. 同 木炭 (C13附近) 出土狀態



6. 同 木炭 (C15附近) 出土狀態



1. 第6号住居址南壁(第2段階)



2. 同 甕(2)、壺(3)出土状態



3. 同 木炭(C4)
出土状態



4. 同 木炭(C18)
出土状態



5. 同 カヤ(C8)出土状態



1. 第7号住居址全景



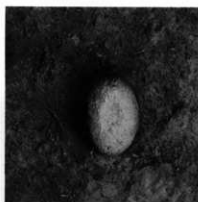
2. 第7号住居址階段状遺構(捨灰)



1. 第7号住居址張り床面の状態（西から）



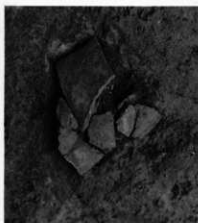
2. 同 小形壺(6) 出土状態



3. 同 磨り石(1) 出土状態



4. 同 高坏片(5) 出土状態



5. 同 高坏か器台片(4) 出土状態



1. E地区発掘前全景



2. E地区発掘後全景



1. E地区古墳墳丘断面（北壁）



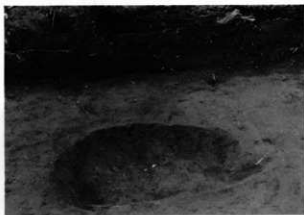
2. 同 周溝断面（西より）



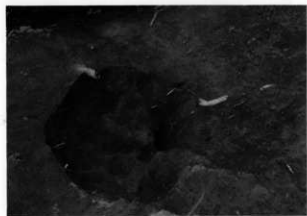
3. 同 周溝断面（東より）



1. E地区炉穴、土坑



2. 同 炉穴



3. 同 土坑



D地区第3层出土

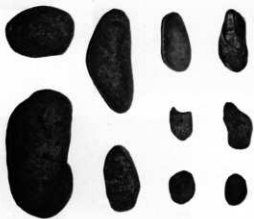


19

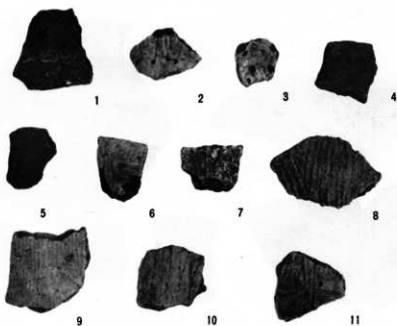


20

D地区第3層出土



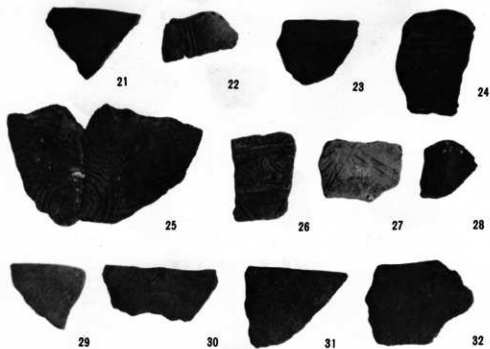
D地区、第3層、各住居址出土小石



D地区第3层出土土器拓影写真



D地区第3层出土土器拓影写真



D地区第3层出土土器拓影写真



D地区第3层出土土器拓影写真



第3号南住居址床面出土



1



2

第3号 南住居址 床面出土



27

第3号 南住居址 覆土出土



6



5

第4号住居址床面土出土



3



2



7



15



1



16 b



16 a

第4号住居址床面覆土出土



30



27

第4号住居址 覆土出土



32



2~4

第5号住居址床面覆土出土



第6号住居址床面覆土出土3a. 1. 8

第7号住居址床面出土6. 1. 3. 2



29



20



30



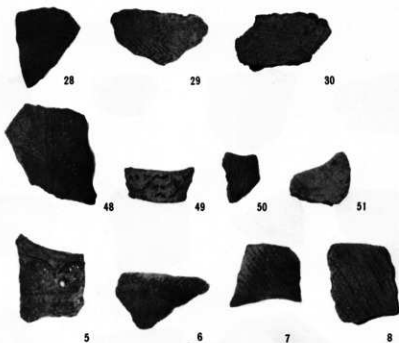
21



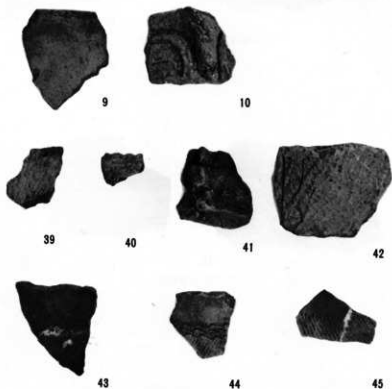
36



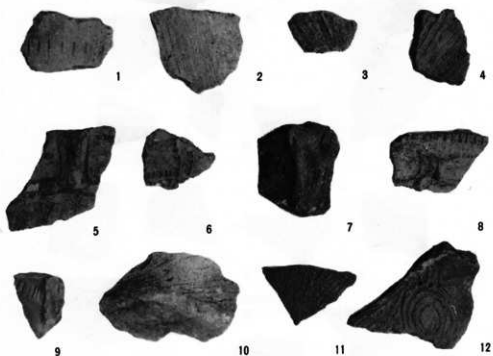
28



D地区各住居址出土土器拓影写真
第3号南覆土28~30、第4号覆土48~51、第5号覆土5~8



D地区各住居址出土土器拓影写真
第6号覆土9、10 第7号覆土39~44 第7号床面45



E地区出土土器拓影写真



E地区出土土埴輪片

おおびた遺跡

—八千代市少年自然の家建設地内遺跡—

発行年月日	昭和50年3月
編集者	おおびた遺跡調査団
発行所	八千代市教育委員会
印刷所	東京都北区中十条2の14の12 株式会社 文明堂印刷所